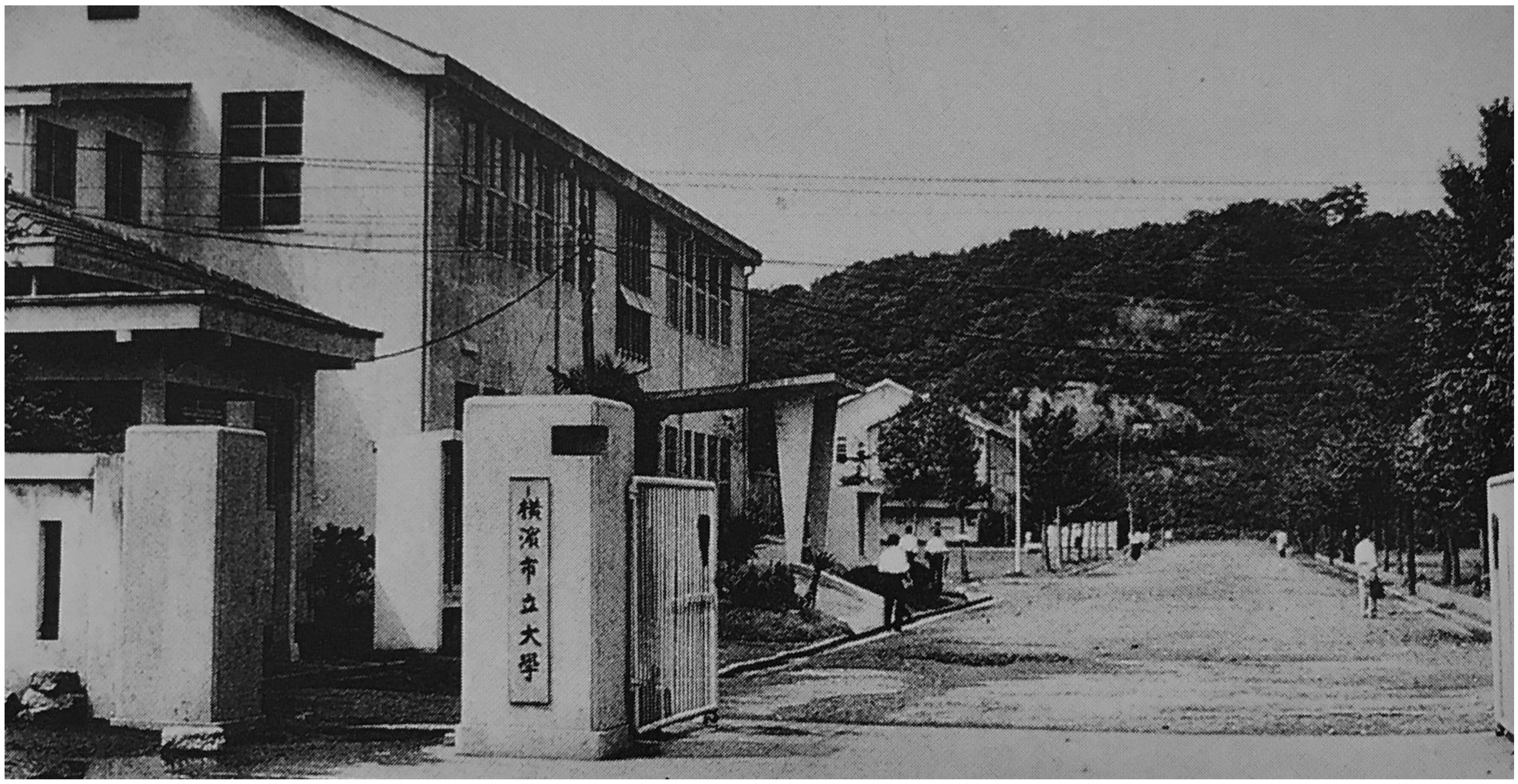


横浜市立大学　創立100周年に向けて！
～金沢八景キャンパスとその歴史展～

横浜市立大学　第73回　浜大祭

YCU金沢八景キャンパス年表

1881年（明治14年）　横浜貿易商組合総理 小野光景ほか27人が発起人となり、横浜商法学校創立の計画を立つ
「横浜商家の子弟に対し商業並貿易実務の為必要なる学術を教授す」

1882年（明治15年）　横浜商法学校（Y校）設立、授業開始

1888年（明治21年）　「横浜商業学校」に名称変更

1898年（明治31年）　横浜市立十全看護婦養成所設置

1917年（大正6年）　横浜市に移管「横浜市立横浜商業学校（Y校）」に改称

1928年（昭和3年）　横浜市立横浜商業専門学校（Y専：商学部の前身）設立

当時、Y校には2年制の専修科があったが、これを廃止し、1ヵ年延長して修学年限3ヵ年の横浜商業専門学校（Y専）を1928年に設立した。その後Y専は1949年に学制改革により横浜市立大学に移行。その為、Y専設立の1928年を創立年とした。

1933年（昭和8年）　Y専に横浜経済研究所設置

1944年（昭和19年）　「横浜市立経済専門学校」に改称（Y専）、横浜市立医学専門学校設置

1947年（昭和22年）　横浜医科大学予科を開設（六浦）

1949年（昭和24年）　Y専を横浜市立大学商学部に移行、「横浜経済研究所」を「横浜市立大学経済研究所」に改称。付属研究所となる横浜医科大学開学
→金沢八景キャンパス開設

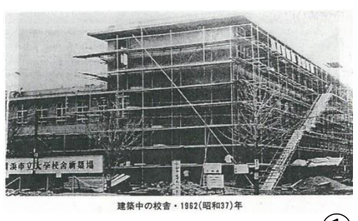
1952年（昭和27年）　横浜医科大学を横浜市立大学医学部に移行
文理学部が発足し3学部（商・文理・医）となる
横浜市看護婦養成所として看護学科、准看護学科が発足

1954年（昭和29年）　専門課程発足
文科7専攻（哲学、史学・地理学、国文学・中国文学、英文学、独文学、仏文学、社会科学）
理科2専攻（数学、生物）

1955年（昭和30年）　医学部6年制に
校歌発表会（県立音楽堂）

1959年（昭和34年）　理科に2専攻（化学・物理）を増設

1961年（昭和36年）　医学研究科（博士課程）設置



①

建設中の本校舎
1962年（昭和37年）

1963年（昭和38年）　本校舎完成
三枝博音学長、国鉄鶴見事故で不慮の死（大学葬）

1965年（昭和40年）　図書館・学生ホール完成

1966年（昭和41年）　横浜市立高等看護学校・横浜市立准看護学校開校

1970年（昭和41年）　経営学研究科（修士課程）
経済学研究科（修士課程）設置

1971年（昭和46年）　市立高等看護学校・市立准看護学校を再編
「医学部付属高等看護学校」に改称

1978年（昭和53年）　文科系研究棟（商文棟）竣工

1985年（昭和60年）　総合研究教育棟（新理科館）落成

1986年（昭和61年）　サークル棟竣工

1987年（昭和62年）　医学部が福浦キャンパスに移転

1989年（昭和64年・平成元年）　総合体育館落成
平成元年（1989）総合理学研究科（修士課程）設置

1991年（平成3年）　経営学研究科（博士後期課程）設置
総合理学研究科（博士後期課程）設置

1993年（平成5年）　国際文化研究科（修士課程）設置

1995年（平成7年）　文理学部を改組し国際文化学部、理学部設置
4学部（商・国際文化・理・医）となる

1996年（平成8年）　国際文化研究科（博士後期課程）設置

1997年（平成9年）　経済学研究科（博士後期課程）設置
シーガルセンター竣工

②

2004年（平成16年）　いちょうの館完成

2005年（平成17年）　公立大学法人横浜市立大学発足
商学部・国際文化学部・理学部の3学部を統合、国際総合科学部設置
経営学研究科、経済学研究科、総合理学研究科、 国際文化研究科を統合し、大学院国際総合科学研究科を設置

2009年（平成21年）　国際総合科学研究科を再編し、国際マネジメント研究科、都市社会文化研究科を設置

2014年（平成26年）　理学系研究棟竣工

③

2016年（平成28年）　YCUスクエア完成

2018年（平成30年）　データサイエンス学部設置
医学研究科看護学専攻（博士後期課程）設置

2019年（平成31年・令和元年）　国際総合科学部を再編し、国際教養学部、国際商学部、理学部を設置

2020年（令和2年）　データサイエンス研究科設置

2023年（令和5年）　第73回浜大祭開催

参考：横浜市立大学100 周年記念事業（参考：横浜市立大学100 周年記念事業（http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~anniversary/）,松本陽一設計事務所（http://msekkei.blog88.fc2.com/blog-entry-26.html）,一般社団法人進交会（http://www.shinkoukai-web.jp/pages/5/）写真出展：①横浜市立大学60年史,②YCU横浜市立大学（https://www.yokohama-cu.ac.jp/index.html）,③学生撮影

横浜市立大学の沿革

横浜市立大学沿革

横浜市立大学の歴史は1882（明治15）年に設立された横浜商法学校まで遡ることができる。この学校は貿易商組合の小野光景らによって設立が計画されたものであり、横浜が当時の日本における第一の貿易港であり、国際商業都市であったことを背景に、諸外国との交易のために、商業の実学を学ぶ子弟の学び舎として設立された。「商法」とはいっても、法律を教える学校ではなく、商売の方法を教える学校である。開校式時には、校舎は未完成であったため、本町1丁目5番地の横浜町会所を仮教室としてスタートし、のちに馬車道・北仲通の新校舎に移り、1905（明治38）年には南太田に校舎を移転した。

民間による学校としてスタートしたが、1917（大正6)年に経営が市に移管され、横浜市立横浜商業学校（通称Y高）となり、これは現在の横浜市立横浜商業高等学校の前身である。この横浜商業学校に設置されていた2年制の専修科を母体に、３年制の横浜市立横浜商業専門学校（通称Y専）が1928（昭和3）年に設立された。これが後の商学部の前身となった。その後Y専は1949年に学制改革により横浜市立大学に移行されたため、横浜市立大学はY専設立の1928年を創立年としている。

一方、医学部の源流は、1871（明治4）年の早矢仕有的による中区弁天通での「仮病院」設立にさかのぼる。この病院は同年に焼失するものの「横浜中病院」として中区太田町で再出発し、さらに「横浜共立病院」として中区野毛老松町に移転する。その後、「十全医院」として神奈川県への移管、「横浜市十全病院」として横浜市への移管を経て、増床も行われた。1923年には、同年発生した関東大震災によって全壊焼失するものの、再興している。その後、1944年4月には文部大臣よりの設立認可を受け、南区井土ヶ谷下町に「横浜市立医学専門学校」が開校し、医専1回生が入学する。このとき、同区の横浜市立十全医院が附属病院となった。

1947年7月には「横浜医科大学同予科」が開校し、2年後の1949年に付属研究所として「横浜医科大学」が開学し、付属病院の名称も「横浜医科大学病院」とされた。その後、1952年に「横浜市立大学医学部」へと移行する。これに伴って附属病院も「横浜市立大学病院」、1954年には「横浜市立大学医学部病院」と改称された。

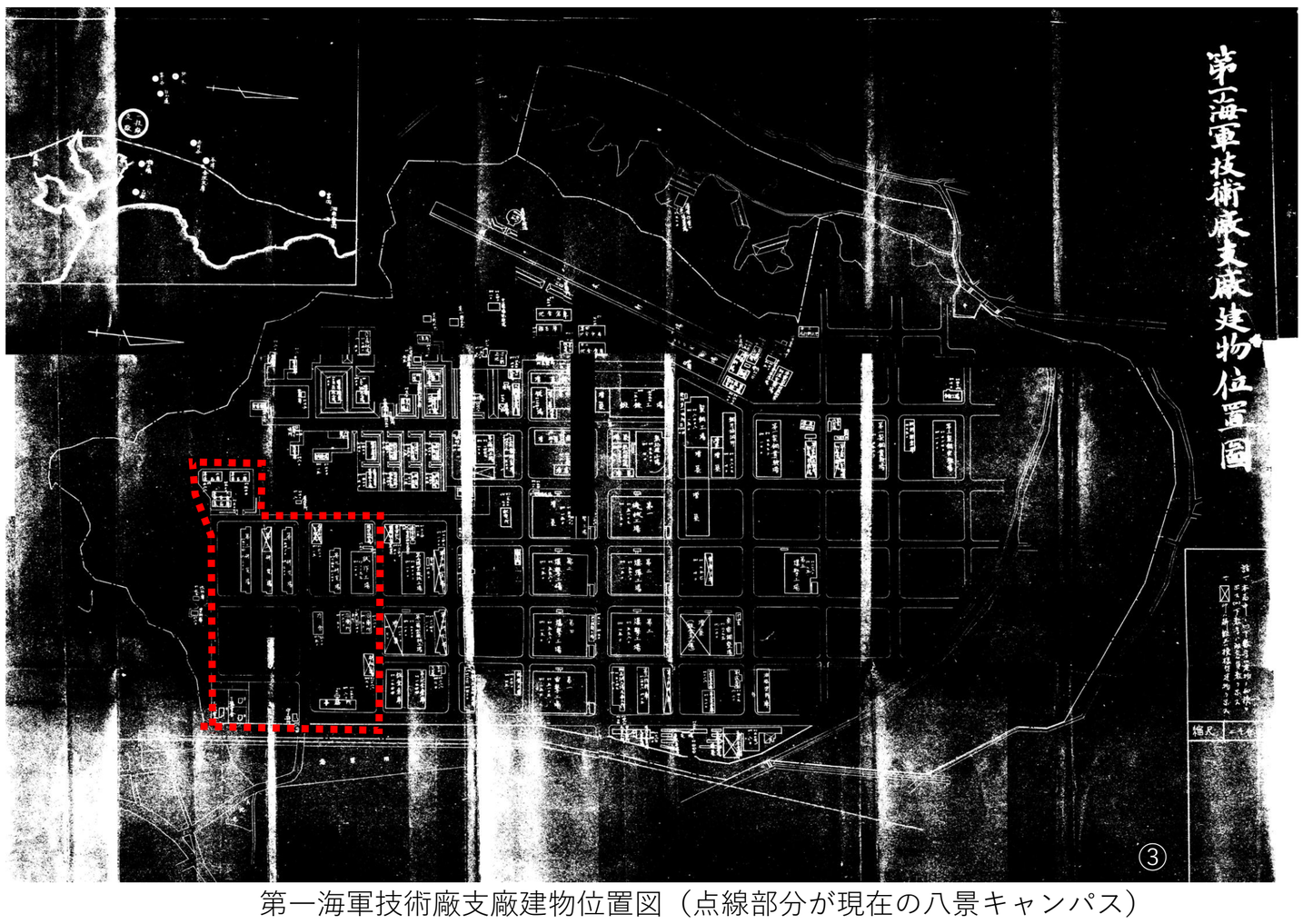
校章の由来

横浜市立大学の校章は1949年に新制大学として発足して以来、使い続けられている。

デザインの由来については諸説あるが、旧字体の「大学」の文字を取り囲むように配されているのは、一説には港横浜のイメージから「神奈川県の鳥」となっている、３羽のカモメであるとも言われている。

八景キャンパスの前身
第一海軍航空技術廠支廠

海軍航空技術廠支廠の一部



第一海軍技術廠支廠建物位置図（点線部分が現在の八景キャンパス）

横浜市立大学八景キャンパスは、横須賀市追浜町にあった海軍の航空技廠本廠の支廠である、海軍航空技術廠支廠の跡地に建っている。支廠とは海軍航空技術廠の業務、施設の拡大に伴い、釜利谷の地に新設されたものである。

本廠では機体や原動機などを扱い、支廠では兵器部門として搭載兵器類の研究、実験施策を担当していた。その全体の規模はおよそ125ヘクタールと広大で、戦争末期には技術者、工員、勤労学徒、その他あわせて約34,000人にもおよぶ人々が勤務していたといわれている。また、付属施設として、茨城県鹿島に爆撃の実験や訓練を行う実験場（鹿島海軍航空訓練場）を所有していた。

支廠は、本廠とともに、横須賀海軍航空隊と密接に連携しながら、日本の航空技術の中心となり、大きな功績を残した。ここで培われた技術は、戦後の日本の発展にも大きく貢献したと言われている。

金沢八景キャンパス航空写真（1945年～1950年）

現在の金沢八景キャンパスには、かつて海軍工廠であったことが感じられる要素が残っている。海軍工廠時代に格子状に区画された敷地計画は、現在でも引き継がれている。また、その骨格となる道路も、かつて軍の大型車両が通れるようにと広い幅員で設計されと考えられ、この広幅員の道路が、開放的なキャンパス景観を創出する要因となっている。ただし、八景キャンパスの象徴でもある銀杏並木は1948（昭和23）年横浜医科大学予科（医学部の前身）の学生たちが植えたものとされる。

キャンパス周辺に目を向けると、金沢高校を挟んだ先に総合車両製作所がある。ここも、かつて海軍工廠があった土地であり、その後東急興業株式会社（後の東急車両）が施設の使用許可を受けて、戦災電車復旧を主体にした事業を開始した土地である。現在は、JR東日本の完全子会社である総合車両製作所となって、鉄道車両の製造を行っている。

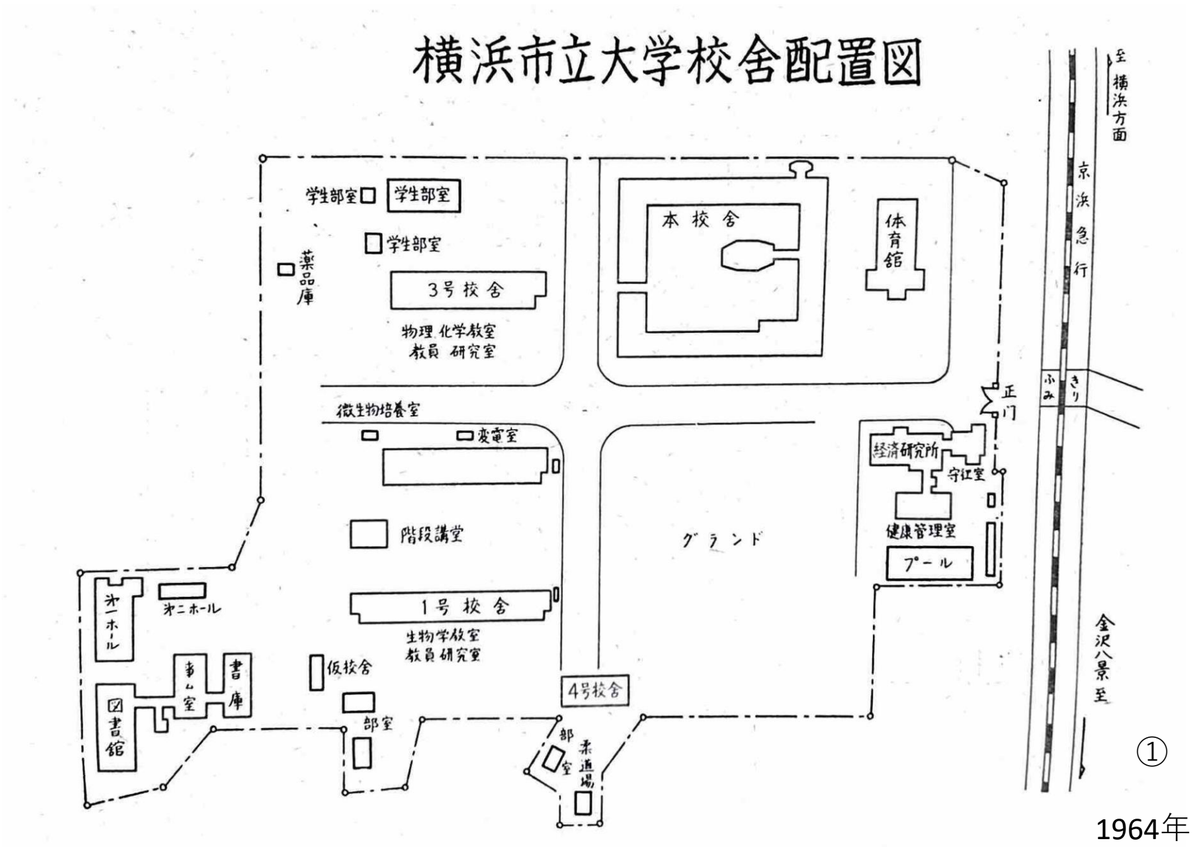
参考：Y校百年史 Y校百周年編集委員会 1982年,オンライン著書『高野房太郎とその時代』 二村一夫 2005年　http://nimura-laborhistory.jp/takanoden15.html,　歴史 100周年記念事業 横浜市立大学公式HP　http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~anniversary/history/index.html, 横浜市立大学と医学会の沿革 横浜市立大学医学会 http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~igakukai/gaiyou/enkaku.html,歴史 100周年記念事業 横浜市立大学公式HP http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~anniversary/history/index.html, YCU について 横浜市立大学の歴史 沿革 横浜市立大学HP　https://www.yokohama-cu.ac.jp/univ/outline/history/index.html,横浜金沢の戦跡 横浜金沢の戦跡を調査する会 平成24年7月20日第一海軍技術廠支廠（海軍航空技術廠支廠）デビット佐藤 https://tokyowanyosai.com/sub/index.html

①本学卒業アルバム(1965), ②横浜金沢の戦跡 横浜金沢の戦跡を調査する会 平成24年7月20日,③アジア歴史資料センター公開資料より作成、④1945年～1950年 国土地理院

戦後の金沢八景キャンパス

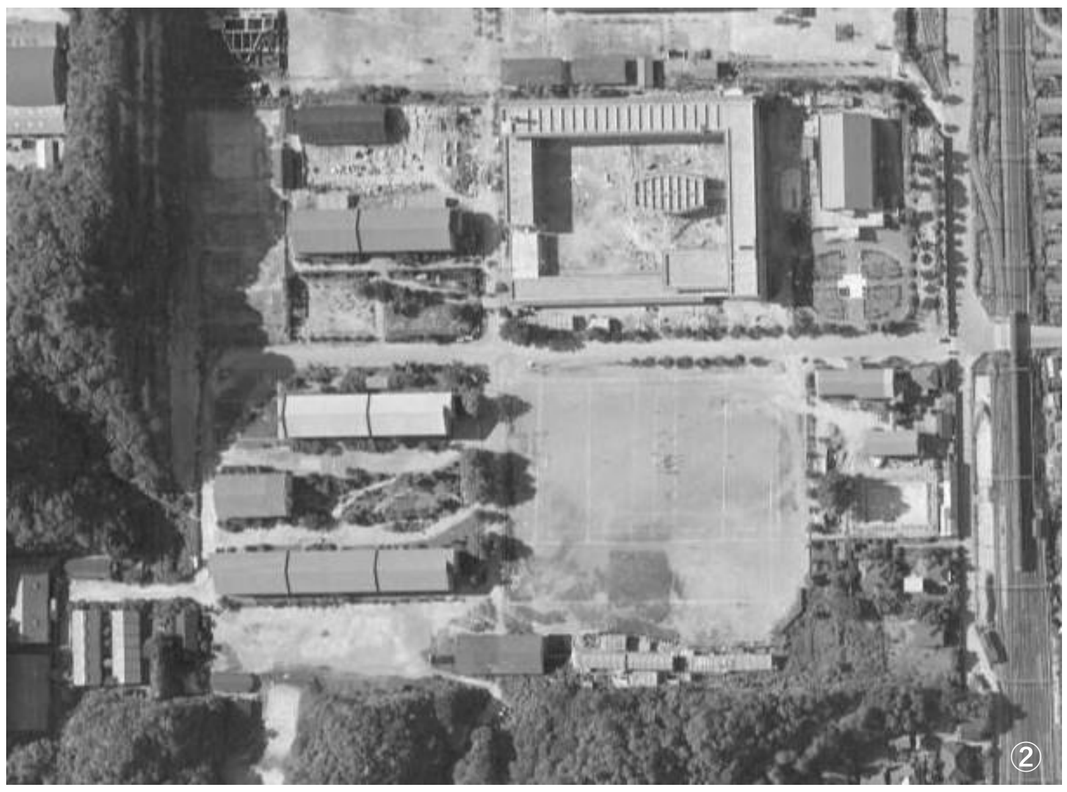
金沢八景キャンパス内の建物の歴史

金沢八景キャンパス内の建物の戦後と今



①

1964年



②

1963年

金沢八景キャンパスの建物年表

西暦	出来事
1963	本校舎完成
1965	図書館・学生ホール完成
1978	文科系研究棟竣工
1985	総合研究教育棟落成
1986	サークル棟完成
1989	総合体育館落成
1997	シーガルホール完成
2004	いちょうの館完成
2014	理学系研究棟竣工
2016	YCUスクエア完成

上記は、金沢八景キャンパス内の建物についてのできごとを年表にまとめたものである。現在も使用されている建物の中には、本校舎などのように完成から50年以上経過したものもあれば、YCUスクエアなどのように2000年以降に完成したものもあり、年代の幅が感じられる。

また、下記の写真は過去の金沢八景キャンパスの航空写真や建物を撮影したものである。
現在よりも全体的に低い建物が多く、平面的にも立体的にも密度も低い印象を受ける。

③

「総合体育館写真」

④

「図書館入口」 1959年

⑤

「本校舎航空写真」 1959年

⑥

「横浜市大風景」 1960年

⑦

「横浜市大航空写真」 1966年

横浜市立大学ニュース

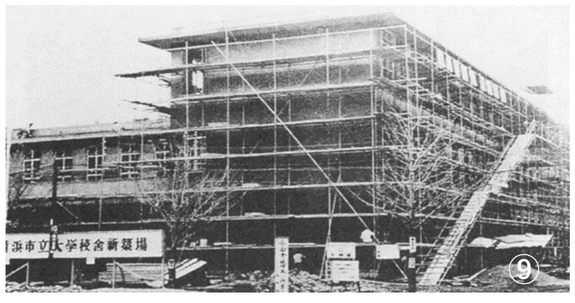
「東洋化工」の爆発事故

1959年11月20日、横浜市立大学に隣接する釜利谷町にあった東洋化工株式会社横浜工場内で、製造中の火薬が突如として爆発するという大事故が発生した。その被害は事故現場から約2キロ範囲内の学校・工場・住宅などの諸施設に及び、本学でも建物のガラス、窓枠及び天井などが大きく破損するという惨事に至った。講義開始後まもない午前中の爆発事故であったために、その時点で登校していた学生の数はさほど多くなかったが、それでも本学の教職員・学生あわせて約150人の負傷者を出している。

このような不慮の事故に対応して、大学は1週間の休校措置をとり、翌日か らは校舎の復旧、講義の再開などについての審議をつみかさねた。開学10年 を経過してもほとんど創立時と姿が変わっていない老朽校舎であったことな ども背景に加わり、本校舎建設を熱望する提言が相次いだ。この運動に取り 組むことになったが、当時の地方自治体の脆弱な体質により、自主的に財源 確保をしなければならなかった。しかしこの基金運動が大きな転機となり、 校舎建設運動はさらなる急速な盛り上がりをみせ、校舎建設促進会が誕生し、 1963年についに本校舎が完成した。

⑧

被害を受ける前の校舎の様子



⑨

建設中の本校舎の様子 1962年

⑩

爆発事故に関する新聞

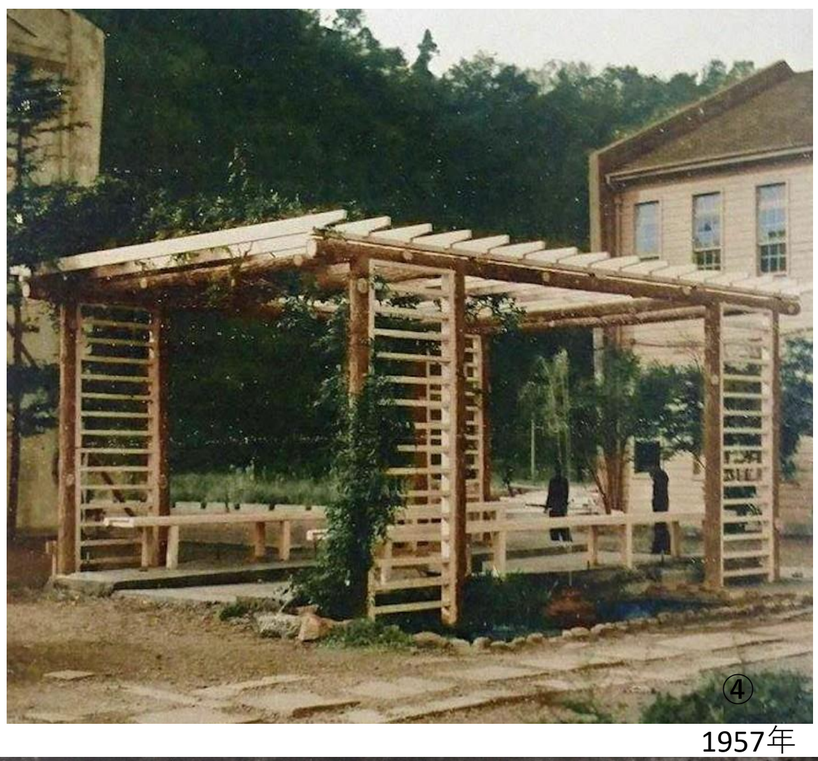
⑪

本校舎落成式の様子 1963年

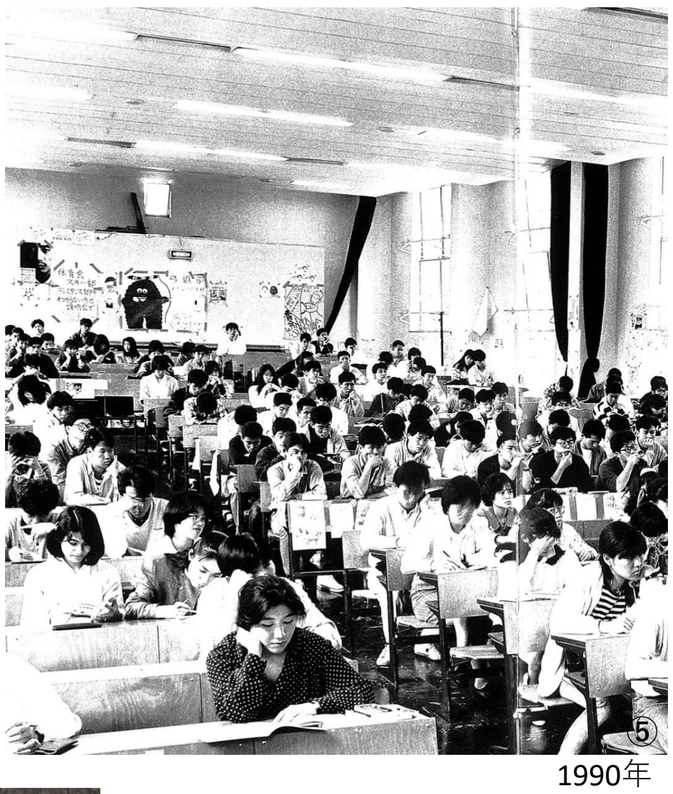
参考：横浜市立大学60年史　横浜市立大学60年史編集委員会
横浜市における歴史的環境保全運動に関する考察　佐野大樹　平成28年
①キャンパス構内図　横浜市立大学事務局総務部学生課　学生便覧1964,②国土地理院　1963年航空写真,③④本学六十年史　横浜市立大学60年史編集委員会,⑤⑥⑦本学卒業アルバム1959,1960,1966,⑧⑨⑩⑪横浜市立大学60年史　横浜市立大学60年史編集委員会　1991年

キャンパス風景の移り変わり Ⅰ

1950年



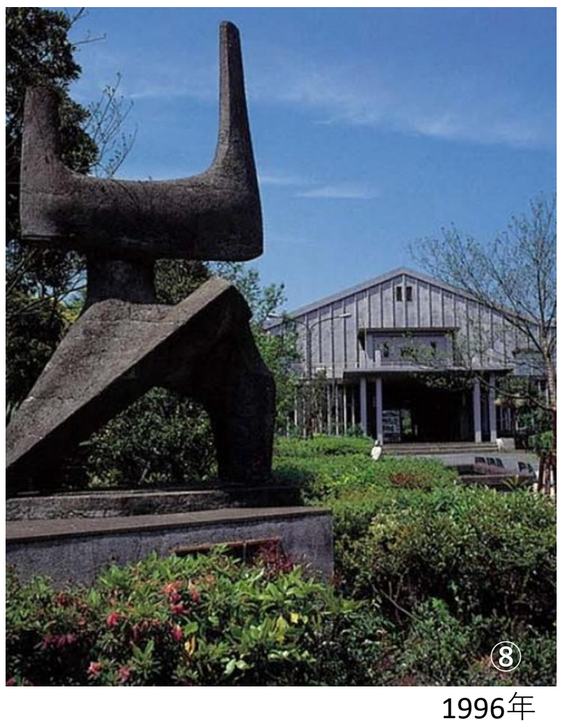
1957年



1990年

1958年

1966年



1996年

①正門への道(卒業アルバム1950s),②横浜市立大学を正門外より(横浜市立大学100 周年記念事業（http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~anniversary/）), ③ 横浜市立大学旧校舎(横浜市立大学六十年史), ④ 第2講堂(現文化系研究棟)に位置する藤棚(卒業アルバム1957),⑤第一講堂(卒業アルバム1990), ⑥裏山に位置していた浜大公園(横浜市立大学新聞部,市大新聞,1958年6月25日), ⑦金沢八景キャンパスの航空写真(卒業アルバム1966), ⑧「若い力像」と旧体育館（卒業アルバム 1996)

キャンパス風景の移り変わりⅡ

シェークスピアガーデン

1983年

これは、「シェークスピアガーデン」と呼ばれていた洋風な庭園である。写真からも分かるように、この場所は学生たちの憩いの場として、利用されていた。1984年頃、総合研究教育棟の増築のために取り壊された。
参考：百年史制作よもやま話　みらいにつなぐ市大の歴史vol.1

サークル棟

1984年

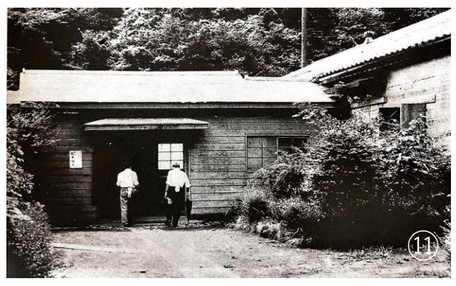
老朽施設の危険性・不衛生を改善する時期にあった1980年代。一女学生のサークル棟の新設の訴えによって、新サークル棟の建設が計画された。1985年に、新サークル棟委員および各サークル代表との間で一年以上にわたる交渉を重ね、1987年、キャンパス西南の山側に4棟93室からなる新サークル棟が建設された。
参考：横浜市立大学六十年史

食堂

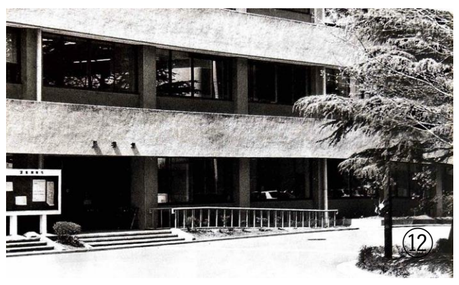
1993年

これは、食堂内の様子である。1985年に第二食堂、喫茶部、購買部、書籍部が結合された。現在は、シーガル食堂、フードショップがあり、お昼時にはとても賑わっている。

図書館



1959年



1990年

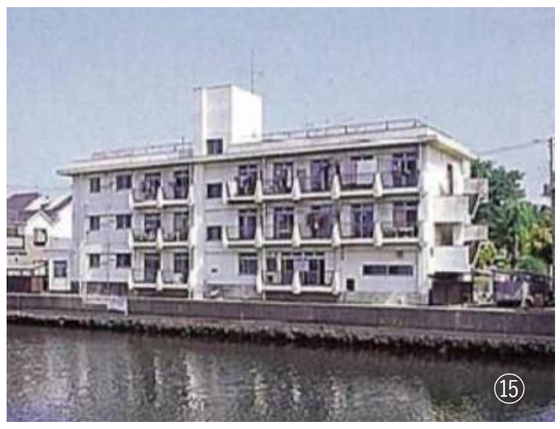
1959年、1990年の図書館である。現在は学術情報センターの名で、生徒のみならず、地域の人々にも利用されている、

1960年代の浜大祭

1966年

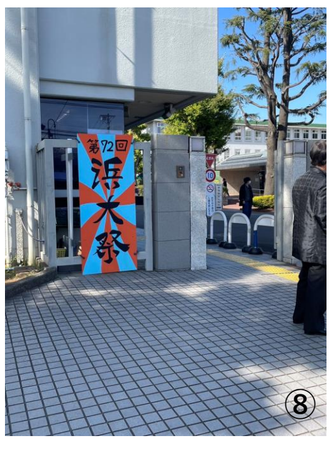
横浜市立大学の大学祭である「浜大祭」の写真である。当時は、駅前で写真のような「仮装行列」も行われていた。

山荘・寮



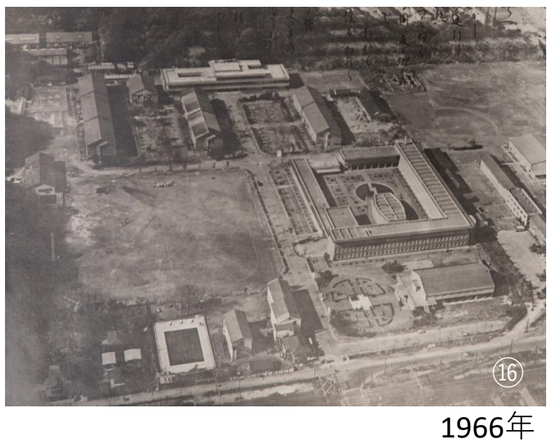
(左)「山荘」と呼ばれた南志賀セミナーハウス
学生・教職員の構成施設として1970年に長野県南志賀高原山田牧場に建てられた。夏の避暑や冬にはスキーに向いた場所であり、1泊200～300円で利用可能であった。
(右) 夕照寮
横浜市立大学の学生が利用できる寮は複数あったことがわかった。白鴎寮、夕照寮、萌生寮、小柴学生自治寮などがあったようだ。学術情報センターでは寮で暮らしていた先輩方によって当時の様子が記されている資料も見つけられ、学生として意義のある時間を過ごされていたことが伝わってきた。

1998年・2022年の浜大祭



左図は1998年の浜大祭である。この時には、現在と同じように、イチョウ並木にサークルや部活動の出店がされていることが分かる。
右図は2022年の浜大祭の写真である。コロナ禍によって制限もあったが、3年ぶりの開催により盛り上がりを見せていた。

キャンパス



1966年

1983年

①理科館とシェイクスピアガーデン（卒業アルバム1983）,③第一食堂（横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ1993年撮影,⑤⑥浜大祭（卒業アルバム1966）,⑦浜大祭（横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ1998年撮影）,⑨サークル棟（横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ1984年撮影）⑭南志賀セミナーハウス（横浜市立大学事務局総務部学生課,学生便覧1985）,⑮優照寮（横浜市立大学広報室卒業生担当,YCU通信,2018年2月号）, ⑯校舎全景（横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ1966年撮影）⑰校舎全景（横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ1983年撮影）②④⑧⑩⑬学生撮影

本校舎の設計者『村野藤吾』

村野藤吾（むらのとうご）
（1891– 1984）

1891年5月15日に佐賀県に生まれる。1918年に早稲田大学理工学部（建築学科）卒業。1929年大阪に村野建築事務所（後に村野、森建築事務所）を設立。1984年兵庫県で逝去（当時93歳）。
日本近代を代表する建築家で、古典様式からモダニズム、和風までさまざまな建築様式の手法を取り入れた独自の作風で、300を超える個性豊かな建築を設計した。また近代建造物として初めて国宝に指定された迎賓館（旧赤坂離宮）の改修や広島の「世界平和記念聖堂」などを手がけたことでその名をはせた。
2005年に宇部市渡辺翁記念会館（1937年築）が村野の作品として初めて国の重要文化財に指定された。翌2006年には、世界平和記念聖堂（1953年築）が、丹下健三の広島平和記念資料館（1955年築）とともに、戦後建築としては初めて重要文化財（建造物）に指定されている。

○村野の４つの代表作

村野の代表作は全国各地に点在している。その中でも特に村野の建築技法が表れ、評価されている４つを取り上げる。

世界平和聖堂（広島県広島市中区）

RC造、三廊式記念バシリカの教会堂で、1954年に竣工、2006年には重要文化財に指定された。
コンクリートの梁と柱の間にレンガを積んだ壁がモダンな印象のファサードであり、アーチ状の間口、窓の形や模様など細部までこだわりを感じる建物となっている。この作品はDOCOMOMO JAPANが選定する日本におけるモダン・ムーブメントの建築にも選ばれている。
（『村野藤吾作品集』より）

日生劇場（東京都千代田区）

重厚な外観と幻想的な内装を持つ建物として知られ、1963年に竣工された。劇場の客席天井・壁は音響効果上、うねるような曲面で構成されており、天井には2万枚ものアコヤ貝の貝殻が散りばめられている。2006年には、日本生命日比谷ビルと合わせて、日本におけるモダン・ムーブメントの建築に選ばれている。
（『村野藤吾建築案内』より）

高島屋東京店(増築)

創建時の名称は日本生命館。日本生命が建設し高島屋が借り受け、一部を日本生命東京総局が事務所として使用していた。1933年の創建時の設計は高橋貞太郎によるが、1952年～1963年にかけての第1から4次増築を村野藤吾が手掛けた。改修にあたっては、独特の外観や店内の趣、機能性を損なうことのないよう増築されたことから、「増築建築の名作」と評され、2009年に百貨店建築初の重要文化財の指定を受けた。
（『高島屋日本橋店S.C』より）

旧横浜市庁舎

数少ない庁舎建築作品のひとつであり、村野藤吾の代表作としても挙げられる。旧庁舎(1956年竣工)は横浜開港100周年事業として起案されたものであり、7代目市庁舎として関内駅前に建設された。庁舎の構成は、高層8階建ての行政棟と4階建ての議会棟、および両者をつなぐ2階建ての市民広場からなる。柱と梁の間をタイルで埋めたファサードが特徴で、庁舎棟は壁面や窓、バルコニーがランダムに配置されている。
高層棟と低層棟を対比的に構成する手法は、戦後民主主義を象徴する大規模市庁舎建築に用いられた典型的な設計手法であるが、両者をピロティではなく内部空間を持つ「市民広場」でつなぐ点に村野の独創性が示されており、設計競技ではこの点が高く評価された。この市民広場の内部には、1，2階吹抜け空間に壁面レリーフ（辻晋堂作）と2階へ上がるオブジェのような階段があり、村野特有の空間を見事に醸し出していた。近隣の歴史的建造物と調和する優れた景観を生み出しており、横浜の中心市街地において、歴史的、景観的にも大きな役割を果たした。
（『M meets M 村野藤吾展 槇文彦展 』、『横浜市庁舎 -近代の文化遺産の保存と活用 - 近代の文化遺産の保存と活用 』、『ヨコハマ経済新聞 』より）

横浜市旧市庁舎街区活用事業

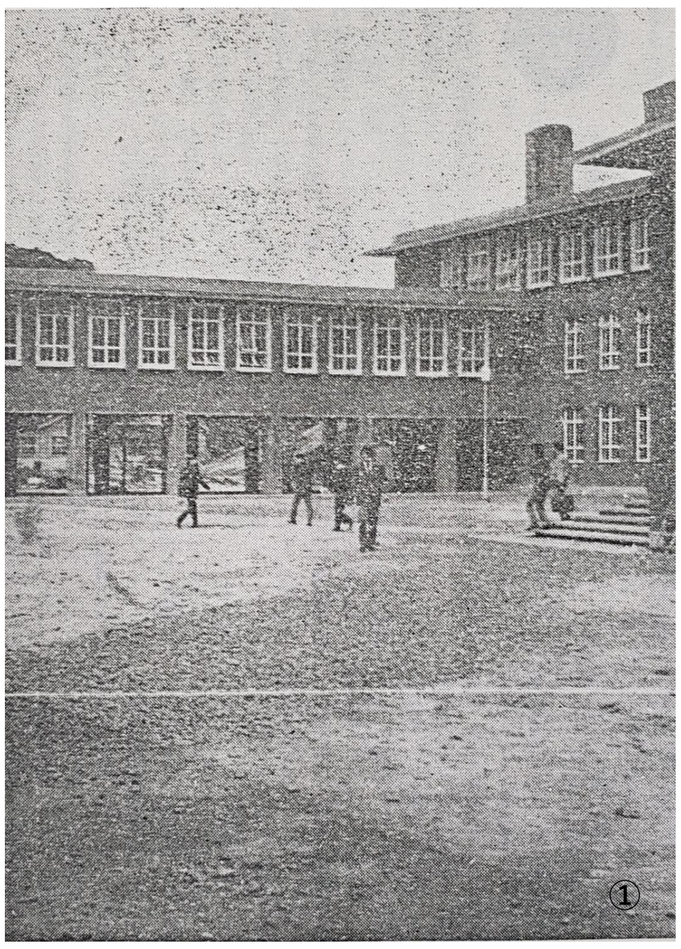
「横浜市旧市庁舎街区活用事業」では旧市庁舎街区に、商業施設、オフィス、ホテルなどからなる複合開発が行われている。旧市庁舎のうち行政棟部分は都市型ホテルとして活用させる予定である。施設自体の開業は令和6年末を予定しており、行政棟等は令和6年6月の先行開業を目指している。
新規産業創出拠点とイノベーションオフィスの設置によって事業テーマの一つである「国際的な産学連携」の実現を図っている。また、「観光・集客」というもう一つのテーマに沿う形で、地元とともに地域資源を発掘し、体験型観光サービスによる集客力と回遊性の強化を目指している。この地区が周囲に開かれたシンボル空間になることで関内・関外地区の活性化とブランド向上が期待されている。
事業は三井不動産株式会社を代表企業として、鹿島建設株式会社、京浜急行電鉄株式会社、第一生命保険株式会社、株式会社竹中工務店、株式会社ディー・エヌ・エー、東急株式会社、星野リゾートの8社により構成される企業グループによって実施されている。
（『ヨコハマ新聞』、『横浜市記者発表資料』より）

本校舎の建築

　1963年に完成された本校舎。
第Ⅰ講堂と中庭を囲み、ロの字型に配された校舎である。この校舎は、昭和を代表する建築家である村野藤吾（むらのとうご）氏が設計したもので、落ち着いた外観や建物配置に特徴があり、キャンパスの雰囲気づくりに大きな役割を果たしている。平成26年11月～平成27年12月に行われた耐震補強については、端正な外観を損なわないよう、内部に鉄筋コンクリート壁を増打ちするなどの補強方法が用いられた。3階は、長寿命化に備えた適切な補修が行われた。

参考文献
金沢八景キャンパス | YCU 横浜市立大学 (yokohama-cu.ac.jp)
横浜市立大学金沢八景キャンパス文科系研究棟及び本校舎（耐震補強）　横浜市 (https://www.city.yokohama.lg.jp/business/bunyabetsu/kenchiku/kokyokenchiku/picture/picture/h27/hakkeitaishin.html)

Before


①

After

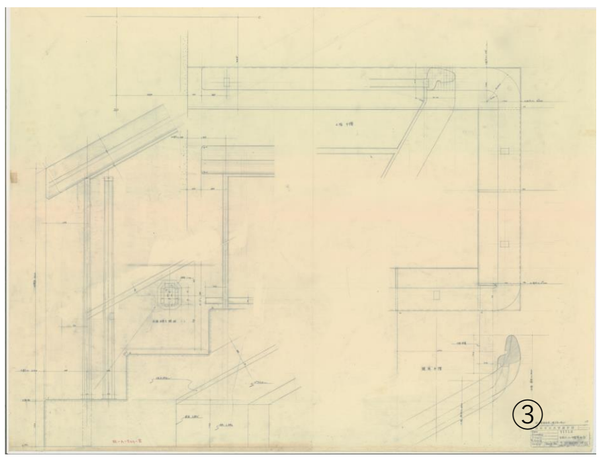
②

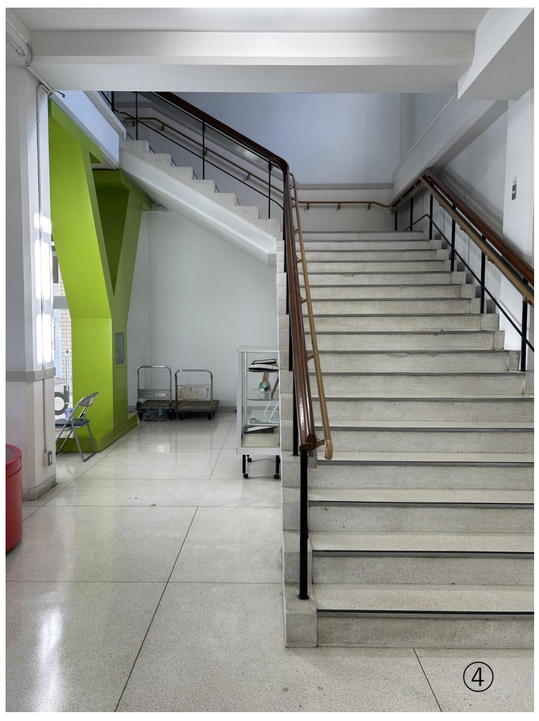
建設当初と
現在の本校舎の違い

　建設当初の本校舎と現在のそれの姿には違いがある。最も分かりやすい点は一階部分の増設である。1966年(昭和41年)の写真（市大新聞）を見ると本校舎の一階部分はピロティとなっており、駐車場などに利用されていた。当初は西側のエリア（現在の総合教育研究棟、旧理科館のエリア）に新たな建物の建設が検討されており、このエリアと一体とするための計画であったと思われる。しかし、その後、増築がなされ情報実習室等として多くの学生に利用される場へと変化した。
　また、左の2つの写真を比較しても分かるように、建設当初と現在の本校舎の外観は外壁の色彩においても大きく異なっている。

玄関ホールの手すり

　村野藤吾は「階段の魔術師」とも呼ばれており、曲線を生かした手摺のデザインなどに特徴がある。本校舎の設計においても、玄関ホールの手摺詳細図が残されている。


③


④

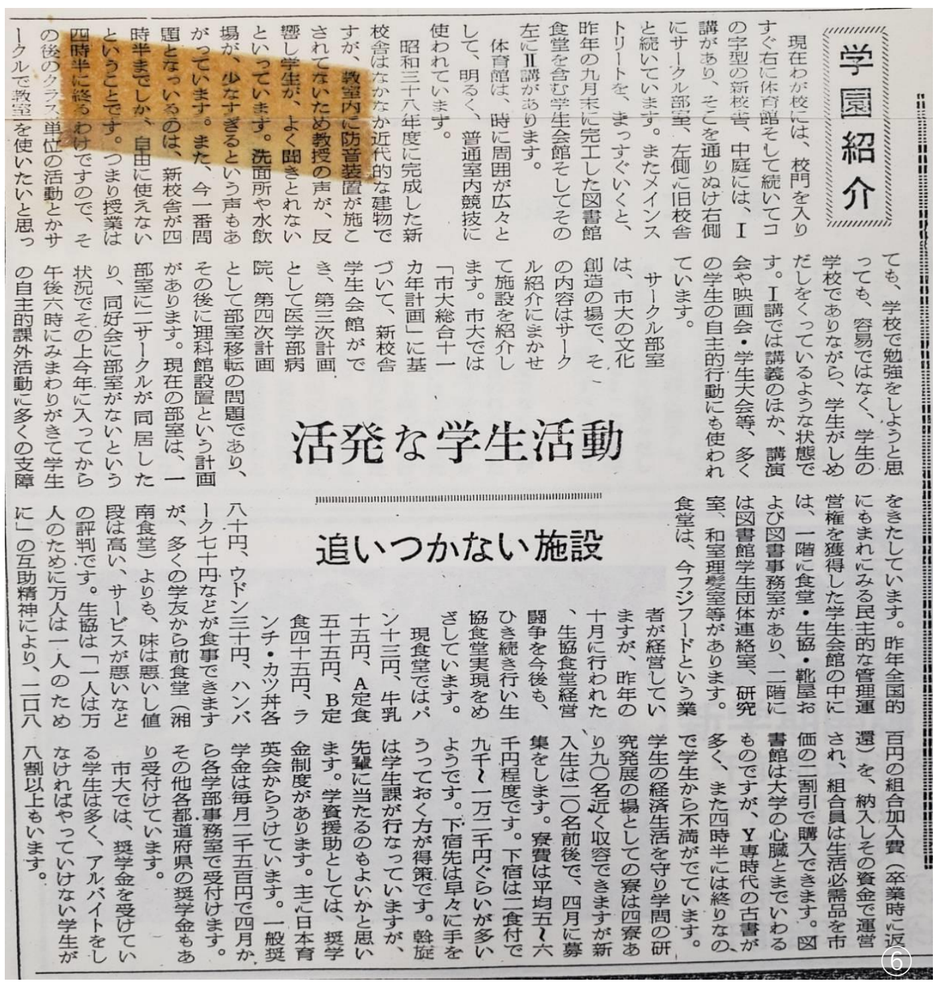
第一講堂前の中庭

　竣工時の写真には池が写っておらず、中庭部分の整備がいつ行われたかについては、図面や資料が残されていない。設計図面には池が描かれておらず、竣工の1963年にはなかったものと考えられ、事後に設計されたものであると推定される。整備当時どのようなランドスケープデザインがなされていたかは不明であるが、「横浜市立大学学生便覧 1967」の写真と比較すると、大きな変化は見られず、第一講堂北側の温室と畑をのぞいて大きな変更はなされていないと推定される。

⑤

当時の学生の声

　「東洋化工」の爆発事故後、学生たちの新校舎建設を求める運動によって建設された本校舎であるが、その本校舎を含め、当時の学生は学校の施設に対して様々な不満も抱えていたようである。下の記事は本校舎建設から3年後の1966年の3月に発行された市大新聞の記事である。横浜市立大学の新入生への学園紹介の記事でありながら、本校舎の防音装置の問題、学生食堂の価格についてなど、施設に対する不満が表れた内容となっている。



学園紹介

現在わが校には、校門を入りすぐ右に体育館そして続いてコの字型の新校舎、中庭には、Ⅰ講があり、そこを通りぬけ右側にサークル部室、左側に旧校舎と続いています。またメインストリートを、まっすぐいくと、昨年の九月末に完工した図書館食堂を含む学生会館そしてその左にⅡ講があります。

体育館は、時に周囲が広々として、明るく、普通室内競技に使われています。

昭和三十八年度に完成した新校舎はなかなか近代的な建物ですが、教室内に防音装置が施こされてないため教授の声が、反響し学生が、よく聞きとれないといっています。洗面所や水飲場が、少なすぎるという声もあがっています。また、今一番問題となっているのは、新校舎が四時半までしか、自由に使えないということです。つまり授業は四時半に終るわけですので、その後のクラス単位の活動とかサークルで教室を使いたいと思っても、学校で勉強をしようと思っても、容易ではなく、学生がしめだしをくっているような状態です。Ⅰ講では講義のほか、講演会や映画会・学生大会等、多くの学生の自主的行動にも使われています。

サークル部室は、市大の文化創造の場で、その内容はサークル紹介にまかせて施設を紹介します。市大では「市大総合十一カ年計画」に基づいて、新校舎学生会館ができ、第三次計画として医学部病院、第四次計画として部室移転の問題であり、その後に理科館設置という計画があります。現在の部室は、一部室に二サークルが同居したり、同好会に部室がないという状況でその上今年に入ってから午後六時にみまわりがきて学生の自主的課外活動に多くの支障をきたしています。昨年全国的にもまれにみる民主的な管理運営権を獲得した学生会館の中には、一階に食堂・生協・靴屋および図書事務室があり、二階には図書館学生団体連絡室、研究室、和室理髪室等があります。

活発な学生活動

食堂は、今フジフードという業者が経営していますが、昨年の十月に行われた、生協食堂経営闘争を今後も、ひき続き行い生協食堂実現をめざしています。

追いつかない施設

現食堂ではパン十三円、牛乳十五円、A定食五十五円、B定食四十五円、ランチ・カツ丼各八十円、ウドン三十円、ハンバーク七十円などが食事できますが、多くの学友から前食堂（湘南食堂）よりも、味は悪いし値段は高い、サービスが悪いなどの評判です。生協は「一人は万人のために万人は一人のために」の互助精神により、二百八百円の組合加入費（卒業時に返還）を、納入しその資金で運営され、組合員は生活必需品を市価の二割引で購入できます。図書館は大学の心臓とまでいわるものですが、Y専時代の古書が多く、また四時半には終りなので学生から不満がでています。

学生の経済生活を守り学問の研究発展の場としての寮は四寮あり九〇名近く収容できますが新入生は二〇名前後で、四月に募集をします。寮費は平均五～六千円程度です。下宿は二食付で九千～一万二千円ぐらいが多いようです。下宿先は早々に手をうっておく方が得策です。斡旋は学生課が行なっていますが、先輩に当たるのもよいかと思います。学資援助としては、奨学金制度があります。主に日本育英会からうけています。一般奨学金は毎月二千五百円で四月から各学部事務室で受付けます。その他各都道府県の奨学金もあり受付けています。

市大では、奨学金を受けている学生は多く、アルバイトをしなければやっていけない学生が八割以上もいます。

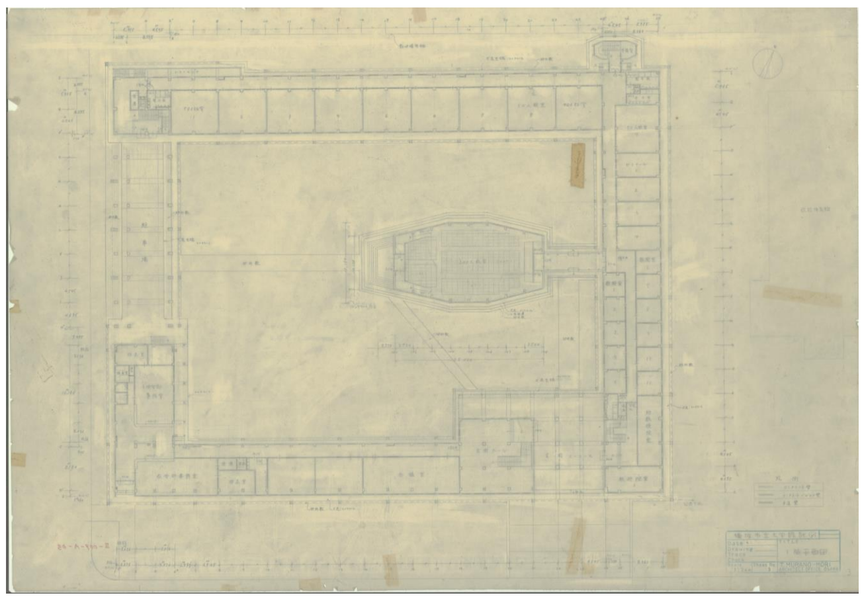
⑥

①横浜市立大学新聞部,市大新聞,1966,②④学生撮影、,③Ⅲ-007-A-038　玄関ホール手摺詳細図,⑤横浜市立大学　学生便覧,1967(表紙),⑥横浜市立大学新聞部　市大新聞1966

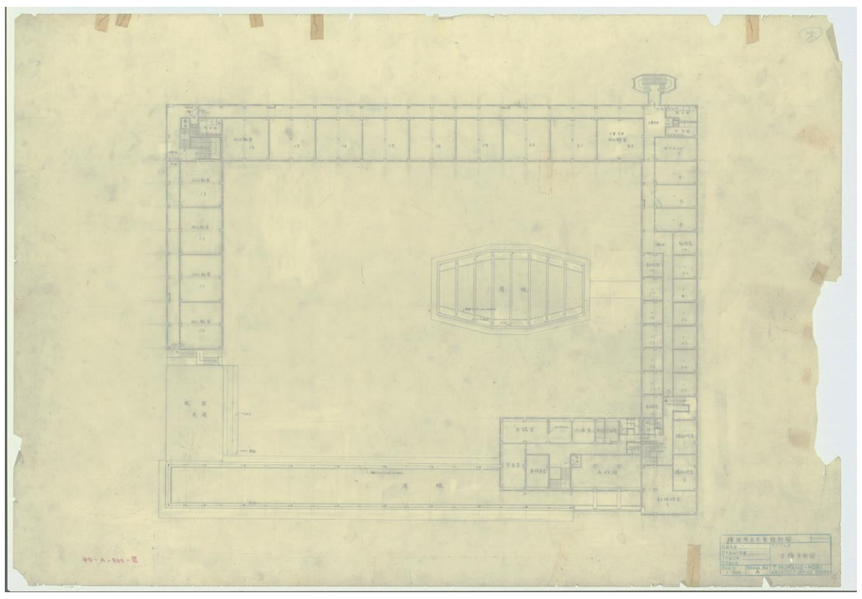
本校舎のスケッチ・図面

村野藤吾（村野建築事務所ならびに村野・森建築事務所）による設計図面は現在、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に所蔵されています。今回は展示作成にあたり、特別に図面データの提供をうけ、展示させていただくこととなりました。京都工芸繊維大学美術工芸資料館ならびに同大学院建築学専攻・松隈洋教授、笠原一人助教には心より感謝申し上げます。（横浜市立大学国際教養学部　鈴木伸治）

実際のスケッチ・図面

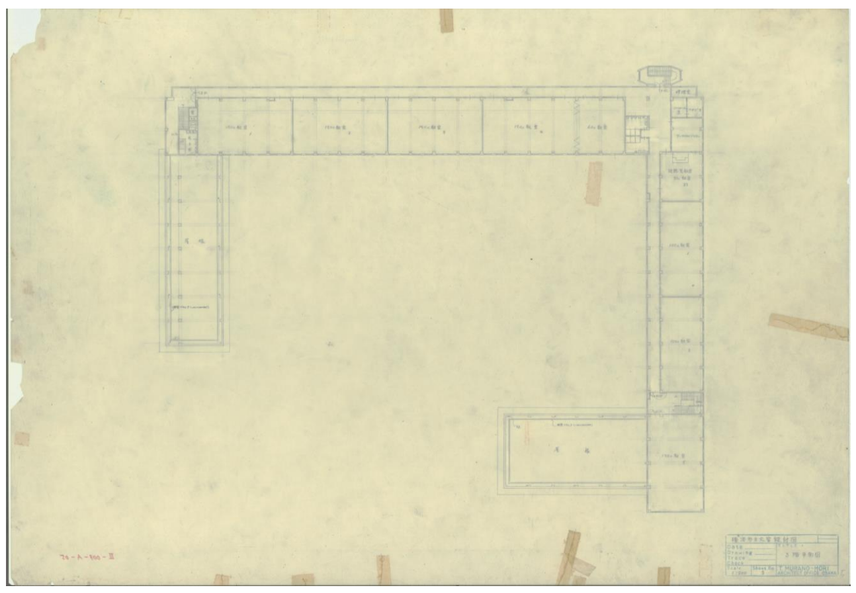


（III-007-A003 1階平面図）

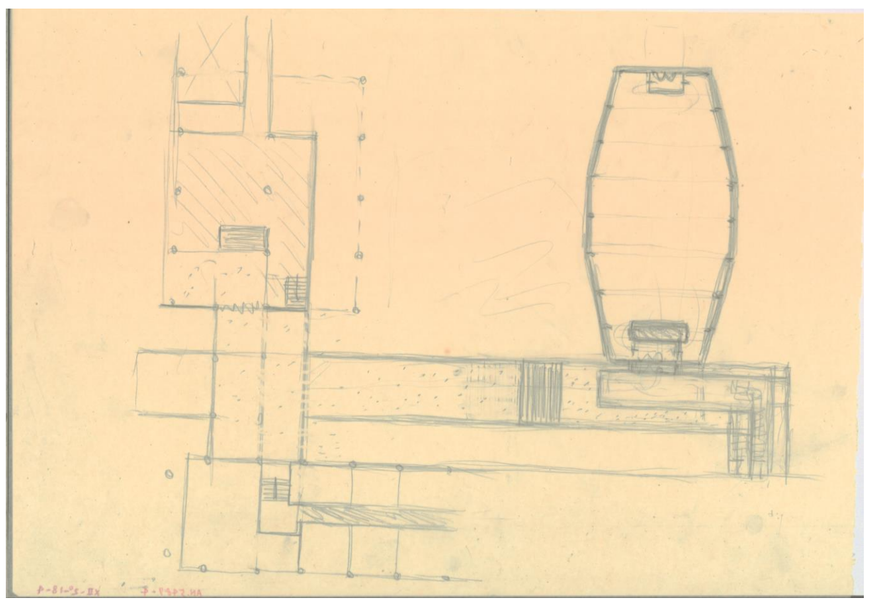


（III-007-A004 2階平面図）

竣工当時は西側校舎の一階部分がピロティとなっており、開放的な中庭となっていた。また、設計時の図面では東棟の一部が中廊下形式の教授室となっていたが片廊下形式に変更された。また、YCUスクエア建設時に通路と渡り廊下が整備されることとなり、通り抜けが可能なように改築がなされている。



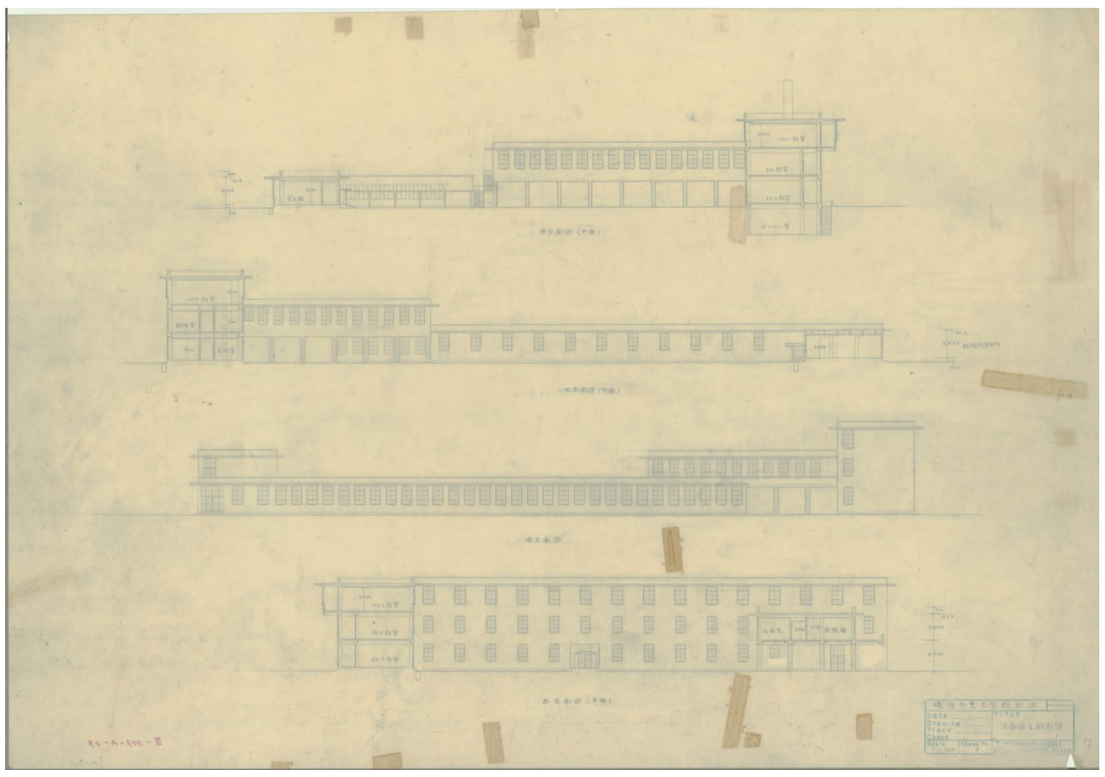
（III-007-A005 3階平面図）



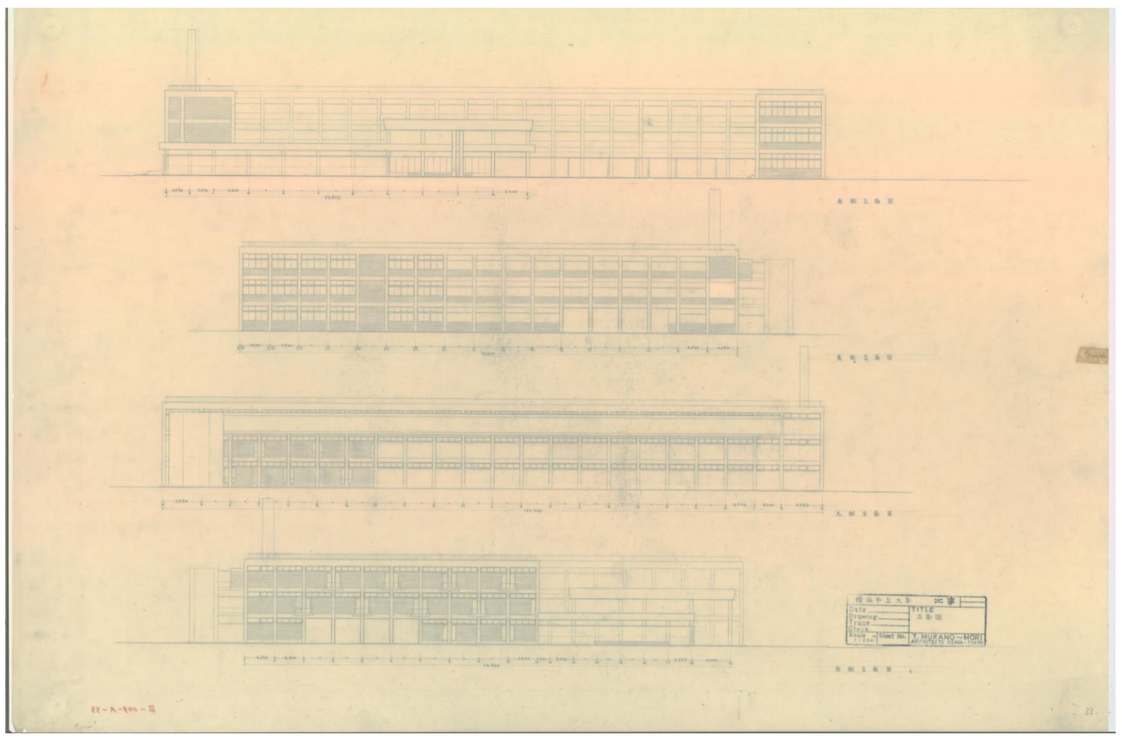
（AN5487-2/XⅡ2°-18-2 スケッチ）

本校舎と第一講堂を繋ぐ通路

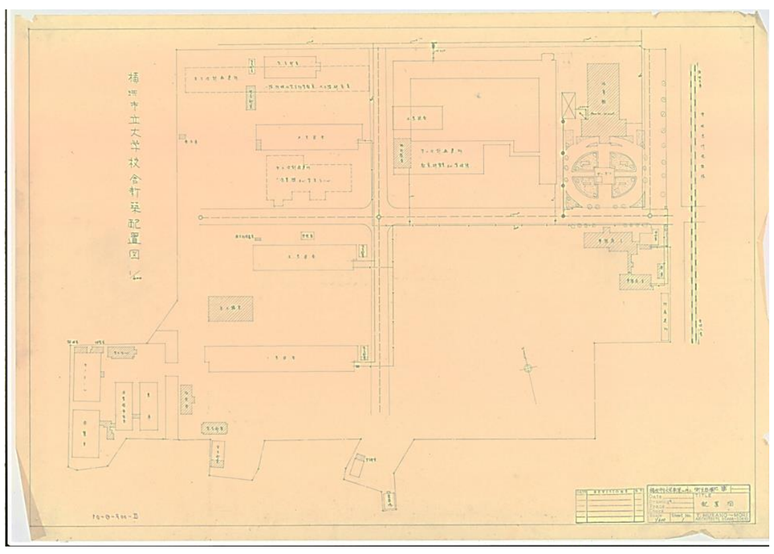
設計案は２案あり、実際に建築された案と、L字状の建物２棟を組み合わせた囲み配置の設計案がある。この案がどの時点で作成された案かについては、日付の記載はなく定かではないが、八景キャンパス全体の配置図にはこのL字２棟案が記載されており、ある程度現実的に検討された案であると推測される。



（III-007-A-007 立面図・断面図）



初期は旧横浜市庁舎（1959）や早稲田大学文学部（1962）などに類似した構造体と一体になったシンプルなファサードデザインである。（III-007-A-033 立面図）



（III-007-D-001 配置図）

上から見た本校舎

配置図(左図)で書かれている第二次計画建物が現在の第一講堂である。

図面提供：京都工芸繊維大学 美術工芸資料館, ①②学生撮影

いちょうの館

「いちょうの館」は、2003年に迎えた市大創立75周年の記念事業の一つとして卒業生からの寄 附金等をもとに建設された交流プラザである。一般への開放も行われており、市民・企業・市大（学生、卒業生、教職員）が相互に交流を深める拠点となることを目的としている。

概要

名称：市大交流プラザ「いちょうの館」
設計：飯田善彦建築工房
施工：明誠建設
建設年：2004年
敷地面積：84,630.89 ㎡
建築面積：432.98 ㎡
延床面積：329.22㎡
構造：鉄骨造＋鉄筋コンクリート造　一部 鋼鉄パネル
施設：多目的ホール／会議室／事務室／トイレ／ラウンジ

建築デザイン

分散された各機能を、交流を象徴する屋根の下に纏めたいという設計者の想いのもと、鉄筋コンクリートの壁の上には連続した屋根がかかっている。
施設外観は既存の大学施設群との調和を意識したデザインとなっており、正門から延びる並木道に面して最も低いボリュームに設計されている。また、入り 口 に設けられている長い軒が、本校舎とのデザイン的な連続性を演出し、傾斜する屋根は背後の体育館のシルエットと呼応している。

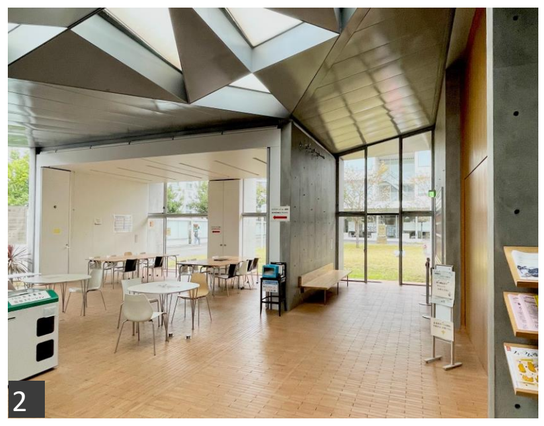
北東側全景。右に本校舎、奥に体育館が見える。外構にはハマレンガ（汚泥焼却灰利用レンガ）を使用している。

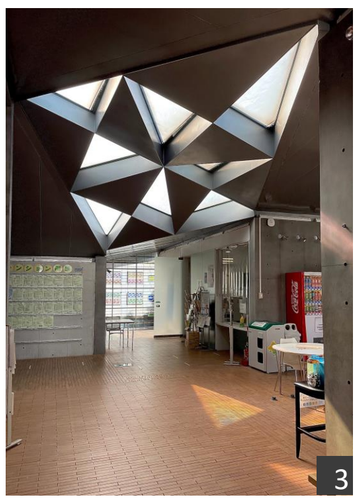
屋根散水システム

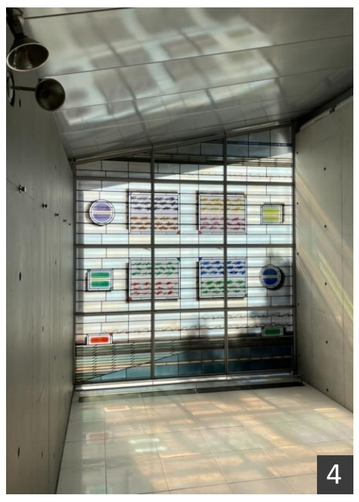
かつて敷地にあった噴水と池のイメージを残すというコンセプトのもと、建物の屋根に打ち水をするという発想で設計されている。散水による冷却効果は、夏の快晴時に約200W/m²程度の効果があることが分かっている。
屋根に散水された水や雨水を、ゲートを兼ねた長い軒のスリットから池に直接戻すことで、水の流れが視覚化されている。

施設紹介

(1) 多目的ホール（50人収容）
生涯学習講座の実施や市民のサークル・グループ活動等への開放を行っている。
(2) 会議室
右には多目的ホールがあり、建具の開閉により使い方が変わる。
(3) ラウンジ
　市民や学生の憩い場であるラウンジは情報の閲覧スペースとしても活用されている。天井には三角光窓があり、床に光模様を作り出している。
(4) ステンドグラス
「未来への光窓」と題された光の壁面。
(5)トイレ前室　ユニバーサルデザインのトイレはグッドデザイン賞を受賞している。







1～5学生撮影

設計者：飯田善彦 / Yoshihiko Iida

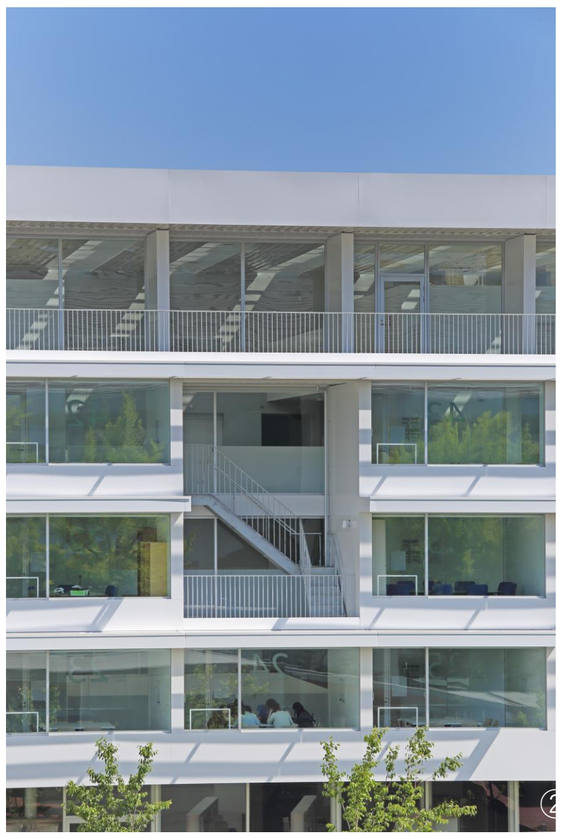
飯田善彦氏
（飯田善彦建築工房HPより）

経歴
1950　埼玉県浦和市生まれ
1973　横浜国立大学工学部建築学科卒業
1986　一級建築士事務所 飯田善彦建築工房 設立
1991　株式会社飯田善彦建築工房一級建築士事務所に改組
2003　横浜市立大学交流プラザ　設計
2007-2011　横浜国立大学大学院Y-GSA教授
2007　日の出スタジオ　設計

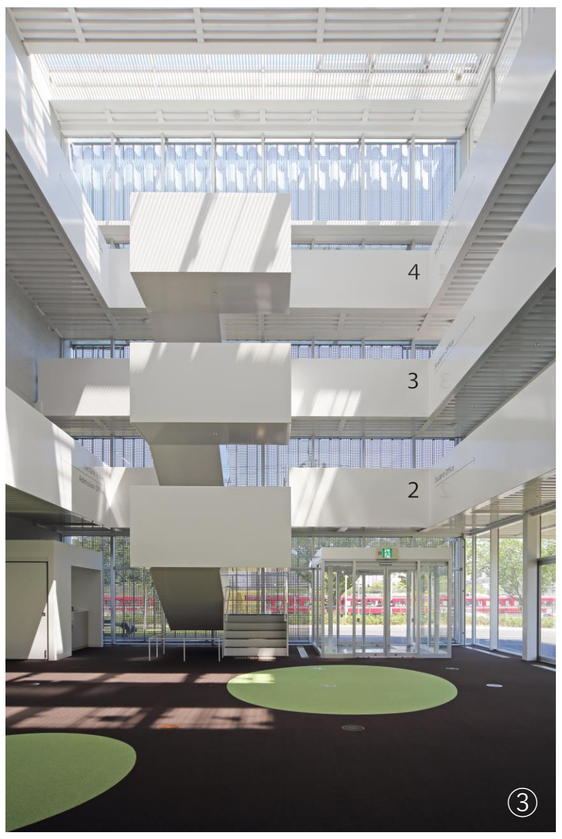
主な受賞歴
1998 日本建築学会作品賞を川上村林業センターにて受賞
2002 中部建築賞、2007年にBCS賞を名古屋大学野依センターにて受賞
2003 神奈川建築コンクール奨励賞を横浜市立大学交流プラザにて受賞
2009 栃木県マロニエ建築景観賞大賞を佐野清澄高等学校佐山記念体育館にて受賞
2010 国際海の手横須賀景観賞を横須賀市営鴨居ハイムにて受賞
2012 神奈川建築コンクール優秀賞をminaGARDENにて受賞
2016 第16回JIA環境建築賞最優秀賞を沖縄県新看護研修センターにて受賞
2016 第4回京都建築賞優秀賞を龍谷大学深草キャンパス和顔館にて受賞
（引用：飯田善彦建築工房HP｜About IAS｜Member 飯田善彦/Yoshihiko Iida）

参考：
新建築 第80巻3号　2005年3月1日発行
飯田善彦建築工房HP
写真出展：①YCU横浜市立大学（https://www.yokohama-cu.ac.jp/）,②③学生撮影

YCUスクエア



撮影：大野繁



撮影：大野繁

施設紹介

（１）スチューデントオフィス

学生のグループ活動を支援するための部屋を設置している。机や椅子は個別に移動可能なため、グループの人数も自由自在に組み替えが可能。正門や広場に面しているためキャンパス全体のシンボルとなっている。

（２）空間

大きな吹き抜け空間である「プレゼンテーションギャラリー」がある。吹き抜け空間により、太陽光を多く取り込むことで省エネルギー計画を図っている。堅固である鉄筋コンクリート造となっているため、工事騒音の軽減がされ、建物全体の水平性が保たれるようになっている。

（３）学生支援の窓口を1カ所に集約

学生支援（履修関連、奨学金関連、留学関連、キャリア支援関連）の窓口を1つにまとめることで、学生の利便性をあげ、横断的な相談にも対応ができる。学生の心身のケアを行う、保健管理センターも学生支援窓口のすぐ近くに設けられている。

（４）ピオニーホール

名前の由来は横浜市金沢区の区花「牡丹」からとっている。ここでは、地域の方と学生、教員が集える交流スペースとして活用が可能。

施設概要

竣工 2016年4月
建築面積：1,446m2
延床面積：4,042m2階
数 地上5階
高さ16m

施設内容

300人教室　2室
100人教室　3室
50人教室　3室
大学院講義室　2室
多目的ホール（ピオニーホール）
学生支援事務室
保健管理センター
スチューデントオフィス　17室

建てられている空間

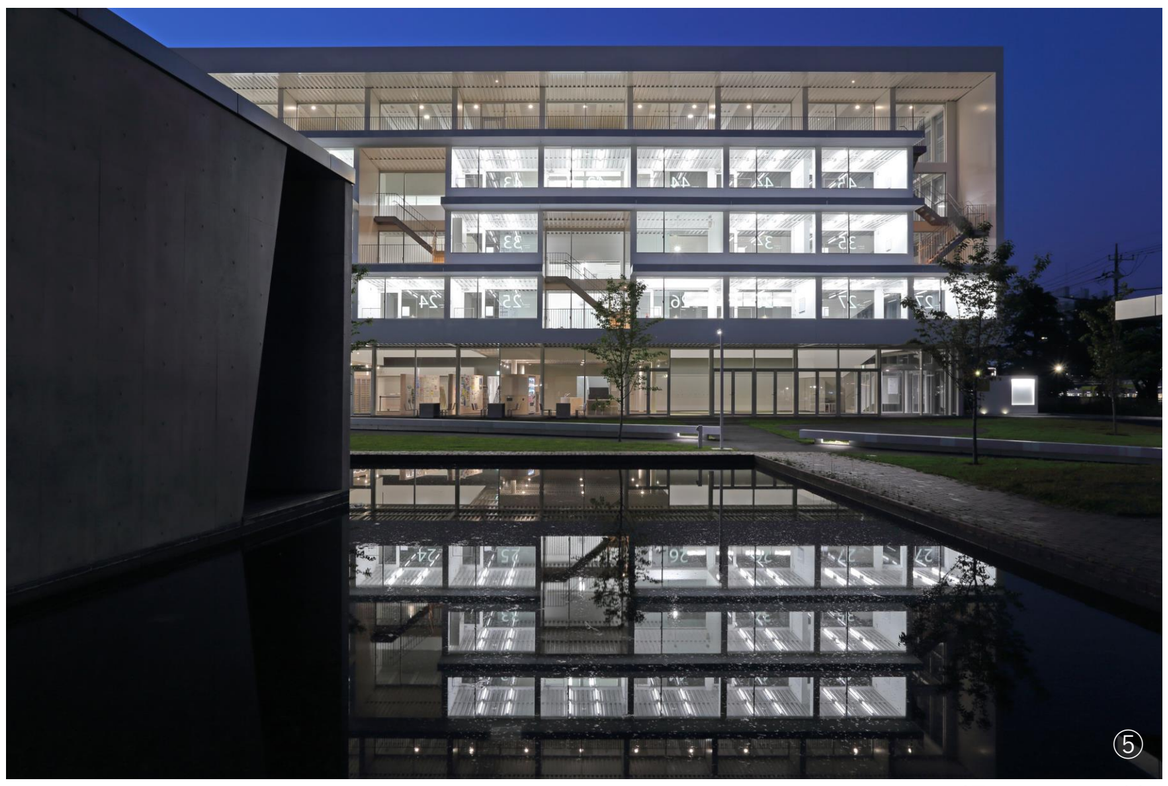
現在YCUスクエアが建つ土地には以前体育館が建てられていた。その後体育館は改修され、アドミッションズセンターとして利用された。その建物が取り壊され、2016年4月、YCUスクエアが建設された

新付属校舎プロポーザルコンペ

2012年、新付属校舎計画にあたって、横浜市建築局が公募型プロポザールコンペを実施。そこで、山本理顕設計工場のシンプルで透明性のある建築デザインが採用された。建築の形やデザインによるシンボル性を求めるのではなく、学生や教員の活動そのものがシンボルになるような建築が提案された。ガラス張りであるため、正面の外観から人の動きが見える点、また太陽光のような自然エネルギーを積極的に取り入れ、省エネルギー化を図った点が評価された。

設計コンセプト

この建物の要件として存在した大雑把なイメージを解体し、目的を固定しない「プレゼンテーションギャラリー」という空間が提案されている。また、地域住民との活動が多くあるという校風に合わせて「スチューデントオフィス」が提案されている。山本によると、全体的には外の景色と一体化しており、光が十分に取り込まれている、境界を感じない空間を意識し、「できるだけ地域社会に開かれるかたちで活動できる雰囲気づくり」がメインコンセプトとされた。



撮影：大野繁

設計者：山本理顕

1945 中国北京生まれ
1968 日本大学理工学部建築学科卒業
1971　東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻修了東京大学生産技術研究所原研究室生
1973 株式会社山本理顕設計工場 設立
2002 工学院大学 教授（-2007年）
2007 横浜国立大学大学院 教授 (-2011年)
2011 横浜国立大学大学院 客員教授 (-2013年)
日本大学大学院　特任教授 (-2013年) 2018 名古屋造形大学 学長 (2018-2022年)
2022 東京藝術大学 客員教授
・主な作品および受賞
「GAZEBO」「ROTUNDA」「公立はこだて未来大学」で日本建築学会作品賞
「埼玉県立大学」でグッドデザイン賞金賞（1999）、日本芸術院賞（2001）、「横須賀美術館」で日本建築家協会賞など受賞多数。国際コンペで最優秀賞に選ばれたチューリッヒ国際空港付属施設「The　Circle」や北京建外SOHOなど海外での評価も高い。近年は「地域社会圏」を提唱し、YCUスクエアの建築も地域に開かれた大学」のあり方を設計を通して提案している。

参考：横浜市立大学大学院都市社会文化研究科HP セミナー02「開かれた大学と地域社会圏」YCUスクエアの設計者と語る超高齢社会のまちづくり

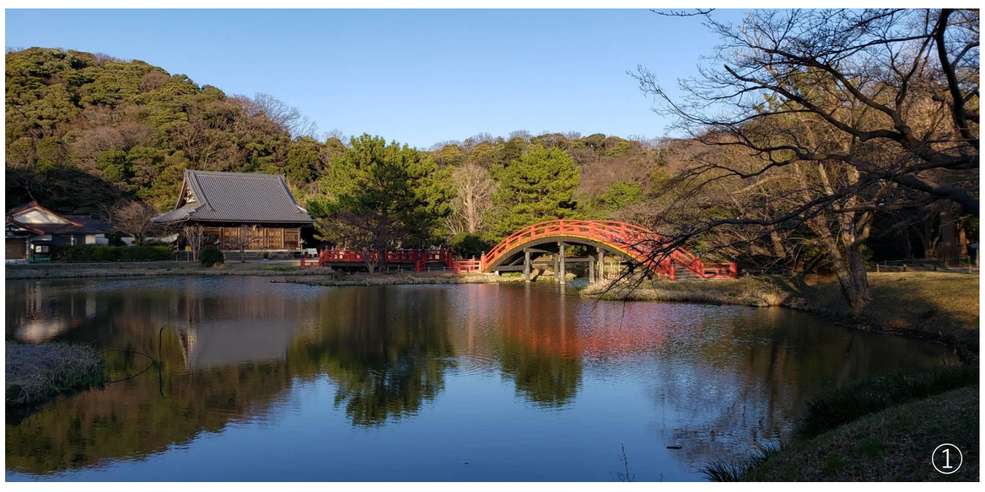
写真出展：①学生撮影,②③⑤大野繁氏より提供,④卒業アルバム1980,⑥横浜市立大学大学院都市社会文化研究科セミナー02「開かれた大学と地域社会圏」YCUスクエアの設計者と語る超高齢社会のまちづくり（ https://www.yokohama-cu.ac.jp/urban/seminar/seminar02/p01.html ）

大学と地域Ⅰ

～称名寺の裏山保存運動～

称名寺

　称名寺は金沢区金沢町にある寺院である。金沢の地は鎌倉にいたるまでの要衝であり、鎌倉時代、北条泰時が六浦、鎌倉間をつなぐ「朝日奈切通しをつくり、甥の実時がその出口にあたる場所に建設したものが称名寺である。隣り合う金沢文庫と共に著名な存在となった。境内の庭園は日本でも有数の浄土曼荼羅式庭園で、極楽浄土をこの世に形象化したものとなっている。周囲を三つの山に囲まれたこの境内が自然と調和した別世界の雰囲気を成している。



称名寺周辺の航空写真

1963/08/23(昭38)

2007/04/26(平19)

称名寺裏山開発の様子

削られた日向山

根岸湾の埋め立てに運ばれる土砂

称名寺問題とは

　称名寺の周囲は日向山、金沢山、稲荷山という三つの山に囲まれている。しかし、称名寺は財政難の影響から、1954年に三山を含む21569坪の土地を西武鉄道株式会社不動産部(以下、西武)に売却、1965年にさらに9047坪を西武に貸与した。すると1966年、西武によってこの三つの山を含む背後地一帯を削り、住宅地を開発する計画が立てられた。自然と人工の一体化した美的な空間はこの三山を失えば消失するといっても過言ではなかった。この計画に住民、市大学生などが反対し、称名寺保存運動が展開されていったのである。

市民と横浜市立大学生による保存運動

市大生、立ち上がる

　称名寺の宅地開発の事態が新聞に取り上げられるようになると、当時横浜市立大学の講師であった岡本勇氏が同学日本史研究室の学生に呼びかけたことがきっかけとなり、1967年11月16日に同研究室で「称名寺を守る会(以下守る会)」が結成される。守る会は市大大学祭でのビラ撒き、金沢文庫駅、横浜駅での署名活動などの反対運動を展開。1968年には西武に対して公開質問状を提出した。新聞もこうした内容をよく取り上げたため、市内に活動が広がっていった。さらに同年2月14日、守る会は婦人会と共に飛鳥田市長と面談を行った。こうした努力はあったものの、4月12日には日向山を10メートル前後けずるという西武の調停案が承認されてしまい、市長が判を押すだけの状況にまで追い込まれてしまう。ところが、そこで急に風向きが変わり、市長が判を押さず、史跡の拡張を打ち出す。市の建築局も西武に対し稜線を削る工事の中止を求めることとなった。

1967 年
10 月 31 日 日本史研究室 市大大学祭でビラまき
11 月 16 日 市大にて称名寺を守る会を結成、市長・県教委あて学内署名数 523
12 月 6～15 日 金沢文庫駅頭で署名活動、署名数 1,373、参加者のべ 63 名
1968 年
1 月 25 日 守る会 声明発表「史跡の風致保存、宅地造成反対、史跡地拡張（仮指定)」
1 月 31 日 守る会 西武に公開質問状を提出
2 月 1～3 日 守る会 横浜駅西口で署名活動、署名数 523 参加者のべ 32 名
2 月 14 日 守る会 八景記念館で市長面談、市長保存に努力、学生 17 名、婦人会 30 名
2 月 20～22 日 衆議員請願（5 月 24 日採択）
2 月 21 日 県議会に請願（3 月 27 日採択）
4 月 12 日 市議会第 5 委員会に代表 5 名出席、動員 40 名
※第 5 委員会本会陳情を不採択
※西武の調停案（日向山を 10m 前後を削る）を承認
5 月 1 日 知事・市長トップ会談 飛鳥田市長、史跡拡張をうちだす
5 月 23 日 市建築局 西武に稜線を削る工事の中止を求める
6 月 4～6 日 西武の暴挙 ブルドーザーを使い日向山山頂を 10m以上削平する
6 月 8 日 市 西武に工事中止勧告
8 月 28 日 文化庁・市・西武 合意に達し、史跡範囲確認の杭打ち
※三山の現状維持と三山の史跡範囲が確定

日本史研究室が保存運動で最初に作ったビラ

史跡の保存へ

　西武に対して、稜線を削る工事の中止が求められ、保存への動きに向かう流れにあった中、西武が突然、ブルドーザーを使い、日向山の山頂を10メートル以上削ってしまった。これを受け、西武に対して工事の中止勧告が出ることとなった。その後、文化庁、市、西武で合意に達し、史跡範囲確認のくい打ちが行われることとなる。実質的にこれをもって保存が決まった形であったが、当時は本当に工事が終わるのか懐疑的であったため、守る会はビラ撒きなどの活動は継続していた。
その後11月1日に文化庁文化財専門審議会にて史跡拡張が決定され、1972年1月31日に史跡追加指定、名前も史跡称名寺境内に変更された。本称名寺問題の事例は学生運動が発端となった歴史的環境保全の成功事例であり、珍しい事例であるといえる。

①学生撮影
②③地図空中写真閲覧サービス　https://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~anniversary/special/special_02/pdf/document-r5.pdf　https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do?specificationId=422042
④⑤⑥「横浜市立大学の歴史を知る講演会」(第三回) 写真資料　天下井恵氏より提供

参考文献　「横浜市立大学の歴史を知る講演会」(第三回)　当日配布資料　https://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~anniversary/special/special_02/pdf/document-r5.pdf
文化財レポート(13)いわゆる「称名寺問題」の解決　平野邦雄　p35～43

大学と地域Ⅱ

～新金沢発見隊SKOP～

新金沢発掘隊SKOPの誕生

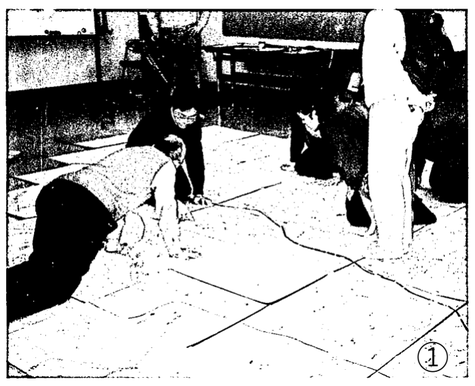
1991年、金沢区では金沢区での特色ある魅力資源の発掘とそれを生かしたまちづくりの実践を目的として「新金沢発掘隊SKOP(SEA OF KANAZAWA OPERATION PROJECTの略称)」という取り組みが始まった。この取り組みは「海を生かした金沢のまちづくり」をテーマに職員の自主研修をきっかけに始まったものであるが、行政と地域住民が出来ることを相互に分担して協働する関係が重視されていたことが背景にある。行政と住民のパートナーシップ形成の鍵はまず住民の意見を具体的な活動に救い上げていくことにあったのである。この取り組みの運営として区の職員に加え横浜市立大学の学生が継続的に参加した。

ガリバーマップで街を知る

ガリバーマップイベントとは千五百分の一程度の地図を張り合わせて作った5メートル四方の金沢区図をイベント会場に持ち込み区民によって自由に個々の持っている「街ネタ」を直接地図に書き込んんでもらおうという取り組みである。この取り組みは参加者に町全体を俯瞰する視点を提供する。そして、地図への書き込みによって機能的にしか見られなかった街が様々な有機的なつながりをもつ面的な空間として捉えられるようになり、都市生活者の眠れるコミュニティを呼び覚ますこととなった。

ガリバーマップから街に出る

ガリバーマップの企画の後、「ガリバーさんの足跡探し」と称し、実際に地図に書き込まれた「街ネタ」が存在する場所を訪れる、まち歩きワークショップが行われた。生活者の視点から光を当てたガリバーマップは水、緑、事績といった行政が考えている典型的な資源のイメージを突き崩し、日常的な空間んが魅力的な資源となることを示した。そしてそういった資源の活用のためにはそれに継続的に関わり続ける個人、団体の存在の重要性が認識された。



ガリバーマップワークショップの様子

まち歩きの様子

「金沢発見伝」の発行

ガリバーマップとまち歩きワークショップの成果をより多くの区民と共有するため、SKOPで金沢面白不思議マップ「金沢発見伝」というイラストマップを編集発行した。地図の表面にはSKOPメンバーである横浜市大生が、野島展望台から眺めた金沢区の俯瞰図がイラスト風に描かれており、裏にガリバーマップとまち歩きワークショップで発掘された金沢区の資源とそれに関わる地域団体の活動が絵巻物風に書かれている。この「金沢発見伝」の最大の成果はガリバーマップで発掘された地域資源と地域団体、個人の活動を金沢区の自然地形に繋ぎ合わせることで「地域生活文化圏」を浮かび上がらせたことである。自然地形と環境資源、歴史資源、地域及び個人の資源までもの結びつきが視覚化されたのである。この「金沢発見伝」の制作活動は当時、珍しい事例であり、新聞などのメディアでも多く取り上げられた。

KYATSの設立

金沢区職員の自主研修から始まったSKOPであったが、関東学院大学など様々な個人、団体の参加により組織改編が課題となった。そして1966年「横濱金澤地域総合研究集団(通称KYATS)」が設立された。組織の活動としては「金沢区のまちづくりに関する地域福祉、防災対策、地域環境、歴史等の調査研究、金沢区の環境資源の現状把握とそれを活用したまちづくりの総合プロデュース等を行う」と明記されている。具体的な活動としては横浜市の中で金沢区の特徴として挙げられる源流から海域までの水の軸線を意識した、「侍従側・平潟湾エコアッププロジェクト」の実施が挙げられる。この活動は学校ビオトープの拡大、環境教育の充実、侍従側中流の水質改善などの成果につながった。この他にも金沢地先埋立事業によって出来た地区において、住み続けられる街づくり、空間的に分断された住宅と企業の交流など、まちづくりに関する取り組みを積極的に進めていった。

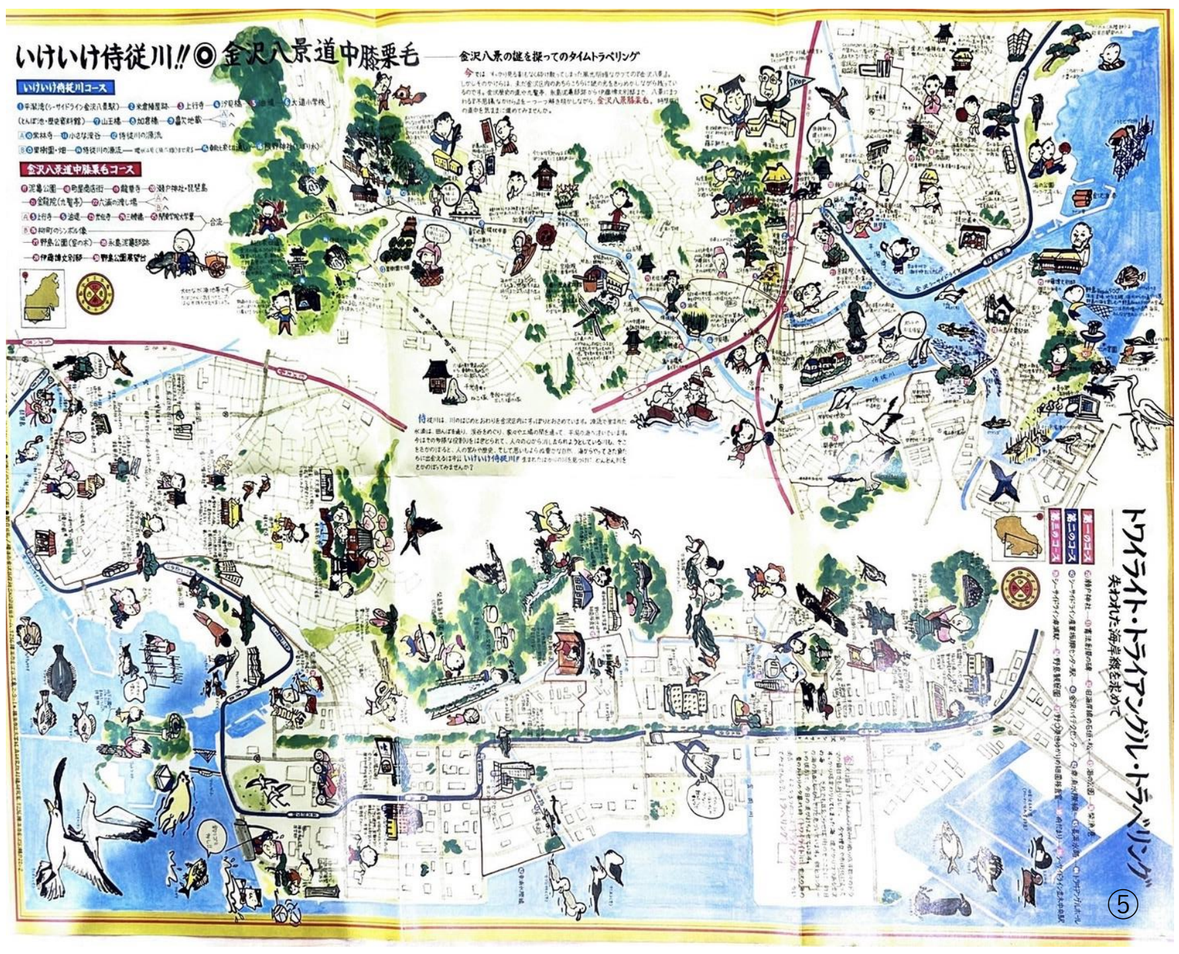
市大生のSKOP,KYATSへ関わり

村橋克彦

1943年3月30日生まれ
1992年に横浜市立大学経済研究所教授に就任し、1994年から5年間横浜市立大学経済研究所長を務めた。
2008年に横浜市立大学を定年退職し、同年4月に横浜市立大学名誉教授になる。その後も活動を続け、2011年に逝去した。

研究では、地域というミクロ的な視点からマクロ視点マクロ視点への結合を目指し、横浜市立大学の学生とともに、市民活動に積極的に参加した。

市大生がSKOP、KYATSなどの地域活動に参加し始めたきっかけとして当時、横浜市立大学で地域での活動を盛んに行っていた村橋克彦先生の存在がある。1970～1980年代までに行なわれた、舞岡における谷戸保存運動などがきっかけとなり、開発などに対する反対運動から市民との協働の活動を展開するようになる。SKOPの活動においては市大生が組織の中心を担い、地域での活動を展開していった。この活動は学生と区役所職員に加え、地域住民も活動の中心に巻き込んでいた。活動の拠点となっていた文科系研究棟では村橋先生、学生、区役所職員、住民が頻繁に集まり、深夜まで活動することもあったようだ。SNSなどのツールが存在しなかった時代に、様々な人が一堂に集まり活動していたことも地域コミュニティづくりの一つの要素であり、また住民が活動に関わったことも地域への愛着を深めることに繋がった。村橋先生が亡くなったことでKYATSの活動は次第に縮小し、KYATSとしての活動はなくなってしまったが、学生たちの政治運動が盛んに行われていた時代に、地域との協働の活動を学生たちが率先して行ったことは当時の先駆けの事例であり、現在の金沢区のまちづくりにつながる貴重な活動であったと言える。



参考文献　横浜市調査季報127号・特集/市民参加の実践　ｐ２～ｐ９
土木計画学研究・講演集　NO.21 1998年11月　地域街づくりにおけるパートナーシップの可能性ー横浜市金沢区での試みをめぐってー　昌子住江
①②横浜市調査季報127号・特集/市民参加の実践　ｐ２～ｐ９,,③横浜市立大学論叢　第59巻人文科学系列第3号　村橋克彦退職記念,④⑤横浜市役所提供

金沢八景の今昔

金沢八景駅

①

1962年

②

1980年代

③

2023年

④

⑤

⑥

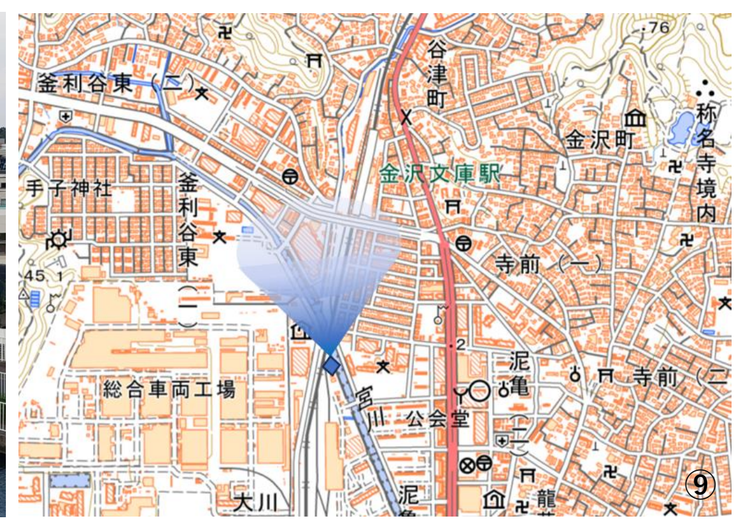
金沢区の風景

❶金沢文庫駅周辺　❷八景団地　❸海の公園、野島周辺

❶

⑦

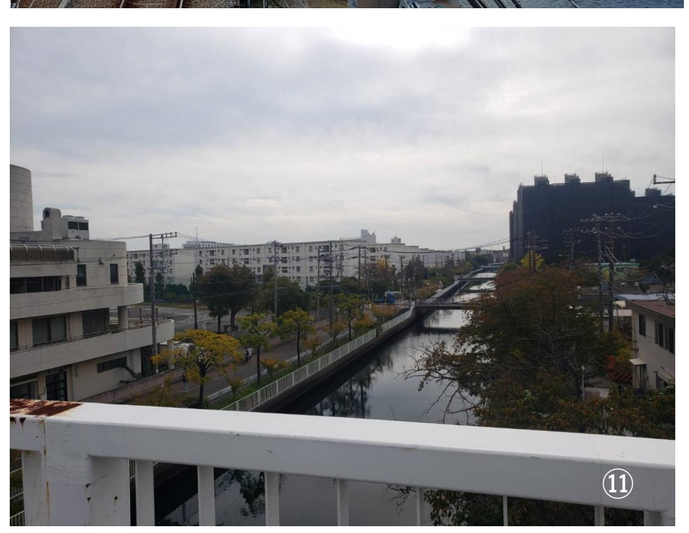
⑧



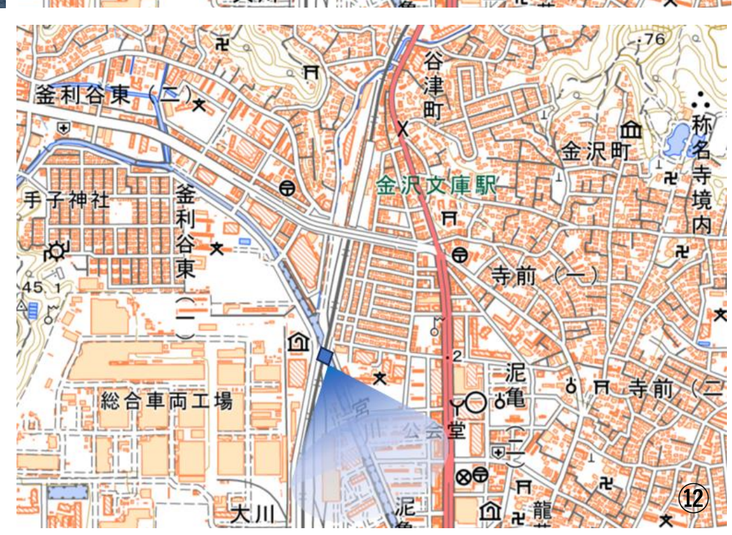
⑨

❷

⑩

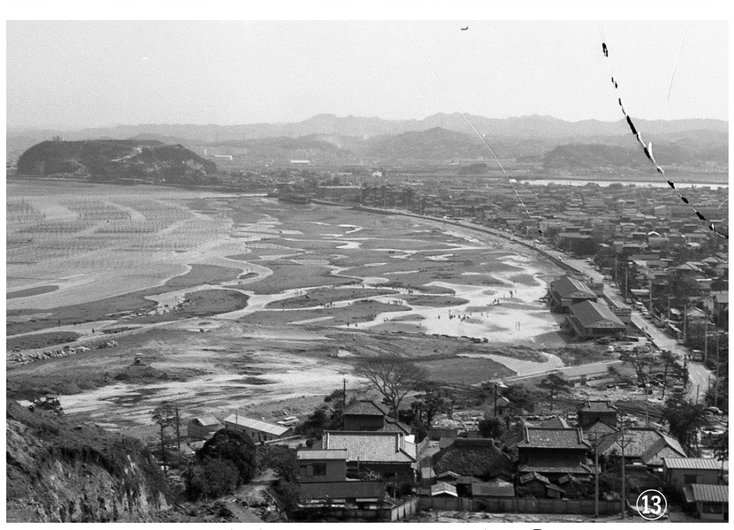


⑪

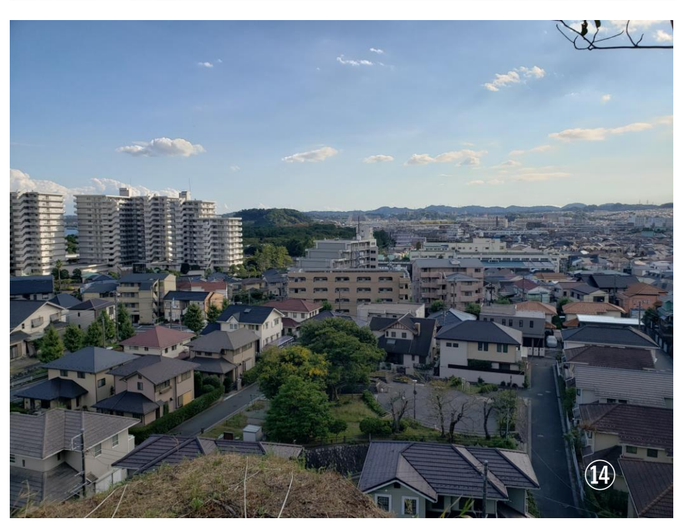


⑫

❸



⑬



⑭

⑮

①②　横浜市立大学デジタルアーカイブ　④横浜市立大学　広報課より提供
⑦⑩⑬　「横浜市立大学の歴史を知る講演会」(第三回) 写真資料　天下井恵氏より提供
③⑤⑥⑧⑪⑭　学生撮影
⑨⑫⑮　地理院地図(電子国土web) https://maps.gsi.go.jp/#5/35.799994/140.668945/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m

航空写真に見る八景キャンパス周辺の変化

1947年

終戦直後の八景キャンパス周辺

　戦前は平形湾の埋め立ても部分的であり、現在よりも規模が大きい。現在の八景キャンパスは戦前の第一航空技術廠支廠の建物群がそのまま残っている。
京浜急行本線をはさんで東側には日本製鋼所横浜工場（1958年に幸浦に移転）が見える。
16号線の拡幅バイパス整備は行われておらず、金沢八景駅から瀬戸橋を渡り、龍華寺、金沢八幡神社を通る現在旧道と呼ばれる部分が16号線である。
また、金沢地先埋立事業も行われておらず、乙艫海岸など当時の海岸線が見える。

1978年

高度成長期の八景キャンパス周辺

　1966年に平潟湾の埋立事業が完了し柳町が設置された。国道16号線泥亀バイパスは1965年に着工し、1969年には完成した。これによって、渋滞問題などは解消されたが、瀬戸神社と枇杷島弁天などは大きく分断されることとなった。
このバイパス建設は、横浜市が計画した都市計画事業に併せて実施されたもので、この都市計画事業によって、かつてハス田が広がっていた泥亀町には国家公務員宿舎、区役所、警察署などの建設が進められた。
　1968年には京急サニーマート（現在も一部現存）が開業したが、これは横浜市南部の郊外型ショッピングセンターの初期事例でもあり、 A棟には京浜百貨店、B棟には東光ストア、C棟には京浜急行直営のドライブインレストラン「ローリエ」 が開業した。 1971年には槇文彦設計により、金沢区役所、金沢公会堂、消防署を合築した金沢区総合庁舎（2016年取り壊し）が完成し、16号線沿いに新たな金沢区心部が形成された。

2019年

シーサイドラインの完成と金沢八景駅前土地区画整理事業

　1989年に新杉田と金沢八景を結ぶ新交通システム、金沢シーサイドラインが開業した。計画では金沢八景駅前地区の再開発を実施し、それに併せて京浜急行金沢八景駅と直結する予定であったが、用地買収が進まなかったため、金沢八景駅は16号線東側の仮駅舎による暫定的な開業であった。その後、金沢八景駅東口地区土地区画整理事業に併せて2019年に本駅舎が設置され、京浜急行と金沢シーサイドラインが直結されることとなった。
　また、駅周辺では1991年には日本製鋼所横浜製作所跡地に当時区内最大の店舗面積を誇る「金沢八景プランタン」（現:イオン金沢八景店）が、開業した。
　2004年～2006年にはキャンパス西側に11棟のマンションからなる当時としては首都圏最大級の大規模住宅開発であるレイディアントシティ横濱が完成した。

横浜市立大学が舞台となった ドラマ・MV・小説

ドラマ「プロポーズ大作戦」

フジテレビ系列の「月９」枠で2007年４月～６月まで放送された日本のテレビドラマ「プロポーズ大作戦」の撮影が、金沢八景キャンパスで行われていたようだ。本学は「立修大学」として登場していた。カメリアホール前の空間や時計台などが登場しており、現在も設置されているベンチに出演者たちが座っているシーンなどが見つけられた。

ドラマ「ブラッシュアップライフ」

2023年1月期の日本テレビ新日曜ドラマ「ブラッシュアップライフ」。主演・安藤サクラ、脚本・バカリズムによる作品で、ドラマとは思えないほどの日常感が話題を呼んだ。本学は、主人公の麻美が通う「西埼玉大学」として登場した。

参考： https://asikotz.com/entertainment/drama/brushup-life/#outline__1_17

平井堅「キャンバス」MV

2008年にリリースされた、ドラマ『ハチミツとクローバー』の主題歌「キャンパス」のMVが横浜市立大学のキャンパス内で撮影された。青春をテーマにした作品で、主演は俳優・田中圭。

小説「正欲」

2022年本屋大賞にノミネートされ話題となった朝井リョウの小説「正欲」。様々な登場人物がそれぞれ悩み葛藤する様子を描き、“多様性”という言葉の本当の意味を考えさせられる作品。この物語に登場する女子大学生、神戸八重子が通うのが**金沢八景大学**。「シーガルホール」が登場するので横浜市立大学がモデルになったことは間違いなさそうだ。

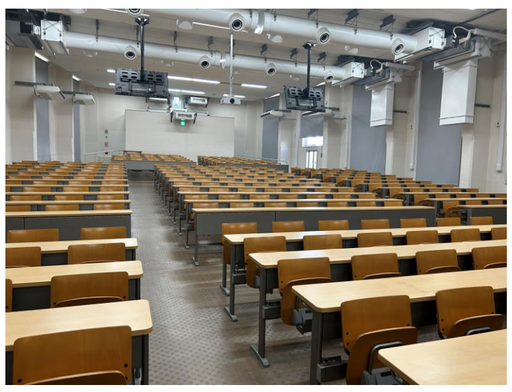
p36　八重子はそう言いながら、今年の学祭について思いを巡らせる。金沢八景大学の学祭の目玉企画がミス・ミスターコンテストであることについては、…
p39　今年までの目玉企画は、三百人以上を収容できるホール「シーガルホール」で開催されるミス・ミスターコンだった。
p43　八重子の家がある三ッ沢上町駅までは、大学の最寄りの金沢八景駅から片道三十五分ほどかかる。

ドラマ「ガリレオ」

東野圭吾の連作推理小説ガリレオシリーズを原作としてフジテレビが制作した日本の映像化シリーズ。

第1シーズンが2007年10月～12月、第2シーズンが2013年4月～6月に放送された。

湯川学（主演：福山雅治）が学生たちに講義を行っているところに内海薫（主演：柴咲コウ）がひっそりと入り込んだり、エンディングの中で講義を行っている教室に本学の本校舎の第一講堂が使用された。



横浜市立大学の著名人リスト

横浜市立大学を卒業した偉大な
先輩方をまとめました

◎**伊藤　雅俊**（1924年）
株式会社イトーヨーカ堂創立者、セブンーイレブンジャパン創立者、デニーズジャパン創立者

◎**幡掛　大輔**（1941年）
株式会社クボタ 元代表取締役社長

◎**浦野　光人（みつど)**(1948年)
ニチレイ元代表取締役社長、日本冷凍食品協会元会長

◎**原口　淳**（1955年）
コニカミノルタジャパン株式会社
元代表取締役社長

◎**大木　茂**（1956年）
高島屋元代表取締役、日本百貨店協会元副会長、東神開発元代表取締役社長

◎**大熊　侑仁**（1958年）
東急不動産ホールディングス元社長、不動産協会元副理事長

◎**末次　由紀**（1975年）
漫画家『ちはやふる』